

ンの證書贗造の、犯罪の自白書を得よ

彼女は矢庭に立上つて室の隅に行つて見た「怪しの物」は忽然と消えて何も異つた事はなかつた。世の中にこれ程不思議な事があらうか、夢ではない。幻でもない。天地の精が教ゆる命令だ。セヴァスチアンナヴァルから自白書を得よ！事容易の如くして決して容易でない、

「海坊主」が書いたセヴァスチアンの共犯自白書は一度は自分の手に這入つたが、不幸にしてレオンテインに奪はれ、後「海坊主」に破られた。それからセヴァスチアンを脅して自白書を書かせ様としたのに邪魔が這入つて果さなかつた、どうしたらそれを手に入れる事が出来るか。ラヴェンガの愛を獲るにはそれを得るより外に途はない。どうしても手に入れてやらうと彼女は決心した。其の時呼鈴が鳴つた。王李が戸口の處へ来て一人の紳士が訪問に來たと告げた、

「よし、お通し申せ」

意外！實に意外！セヴァスチアン自身がやつて來たのだ。彼れはピアンカの顔を少しばらく見て、軽く會釋し、

「仕事がかうまく行かなかつたのはお氣の毒に存じます」と、セヴァスチアンは言葉を切つて、

「あの自白書は勿論偽物ですが、私を買つてもよかつたのです。妻が餘り心配するので困つて居ります」

「奥様方は兎角殿方を困らせるものです」と、軽く受けて、

「まあ御かけなさいなナヴァルさん」

彼れは勿論彼女の傍に座を占めた。敢て勿論といふたのはこれから後を読めば判る。

「私は其の自白書の行衛を知りません、妻が紛失したか盗まれたか、どつちかでせう。しかしどうしてもそんな事はかまわん。今日御邪魔に上つたのは外の事で」

「外の事？何ですか聴して下さいな」

「貴女のお顔を見に来たのです。ビアンカさん、私は貴女に……」

ビアンカは此の時彼れに擦寄つた。セヴァスチアンの顔に髪の毛が觸れる位に。

セヴァスチアンは急にビアンカを抱いたそして兩人の唇は合した。レオンテインの愛を獲る事が出来ないセヴァスチアンは必然の結果として愛を他に求めた。實を云ふと、彼れはもう辛抱し切れなくなつた。名義丈けの結婚、こんな馬鹿くしい事があらうか、

「情慾を離れて戀もなし」と、詩人は謠ふて居る、セヴァスチアンのレオンテインに對する熱情は今や冷えて居るのだ。レオンテインに取つてはこれ程都合のよい事はない。

「戀は行き又來る、小枝に飛び交ふ小鳥の如くに」と、いふ歌の心はレオンテインには當て筈らなかつた。チャリーが此の世を去つて以來彼女には戀の情が湧かない

セヴァスチアンの心が他へ移る様になつてから彼女は自由に社交界に出入し得る様になつた。或る麗かな春の午後飛行俱樂部に於て、レオンテインは飛行家ボブハミルトン氏と會談して居つたがやがて、セヴァスチアンの許を得て二人は自動車で出かけた。ハミルトンは新進飛行家で次の週には長距離飛行競争に参加する事に決まつて居つたのだ。此の長距離競争はいたく世の人氣を引いて飛行場は毎日の見物人で黒山をなすと云ふ素晴らしい前景氣であつた。ボブはレオンテインを顧みて、

「奥さん僕は思ひ切つて大膽なお願ひを貴女にしてみたいと思ひますが」

「どうぞお聴かせ下さい」

「實は來週の競争飛行は操縦者は一人の乗客を同乗させる事になつて居るのです」
青年飛行家は一寸言葉を切つて、

「それで其の乗客には私の義妹を乗せる事に決まつて居つたのですが、昨日になつて急に氣が變つたのです。そこで貴女は如何かと存じますので……」

「妾は乗りたいたんです」と、レオンティンは熱心だ。
 「それでは、そう云ふ事に決めて置いてもよいでせうか」
 「一應夫に相談しなければ、だが萬が一にも拒絶する様な事はないと存じます」

第二卷 脛に傷持ちや

拒絶する筈はない、自分に飽が来た今日、セヴァスチアンは寧ろ妾が墜落して惨死する態を見て喜ぶ位のものだらう——と彼女は考へた。

「おや、ナヴァル氏が」と、飛行家は、向ふから盛装した婦人を伴つたセヴァスチアンを指した。婦人といふのはピアンカだ、セヴァスチアンはピアンカの云ふが儘に、妻が居るとは知らず飛行場に自働車を驅つて來たのだ。彼れは見付けられたと思つたので狼狽してピアンカを離れて獨りで近寄つた。

「セヴァスチアン、今度の飛行にハミルトン氏が妾に同乗してはどうかとおつしや

るんですが、乗つてもよくて？」と、レオンティンは夫に聞いた。

「それはお前が乗り度いなら、よいともく」
 心で墜落せばよいと思つて賛成した。

「それでハミルトン氏は今晚々餐を一所にしに宅へお出になります」

「どうぞ御出で下さい」と、セヴァスチアンはハミルトンに無愛想に云つた。二人が話を交はして居る間にレオンティンは周圍を見た。彼女の眼は期せずして運動服を着た、一人の男に落ちた。其の男は繩に身を保たせて、四邊の光景を素知らぬ顔で見廻して居るのであつた。彼女は其の男が「海坊主」のルイであるのに氣が付くに及んで驚ろいた。彼女の手から大切な自白書を奪ひ取つて破り捨てた大悪漢！彼女は身の毛を慄然てた。

「海坊主」を認めた人がもう一人あつた。それはハミルトン氏の助手はアヴェーといふ摩訶の顔をした男であつた。彼れはルイを驚ろきの眼で見居つたがやがて煙

草の吸殻を捨て、進み寄つた。

「やあ！海坊主………久し振だな、三年前の昔馴染のアヴェーを忘れはしめい」

ルイはボンヤリした眼で相手の顔を眺めた。

「今迄君になんか會つた事もない」

アヴェーが呆氣に取られて居る間に、ルイは群集に交つて外の方へ出て仕舞つた。「歡樂閣」の火事で材木に撲たれてから彼れは過去の記憶を失つて仕舞つた。彼の頭にある唯一つの事は金山で儲けた巨萬の富を如何せば安全に保管して行けるかといふ事であつた。それだから、人に話しかけられるとみんな自分の財産を覗ふ悪人だと決めて仕舞ふた。更に一人の男が「海坊主」を見た、それは悪漢ロマノフである、彼れの前名は「赤鬼」のフキンといふてルイが金を掘り當てた時それを奪はんと覗つて居つた事は讀者は御存じの筈である、彼れは今此の飛行場に於て「海坊主」に遭遇するに及んで愈々機會到來せりと心中大に悦んだ。彼れはさすられぬ様

に尾行して「海坊主」が小さい宿屋へ這入るのを見て外に身を忍ばせた。

「海坊主」は窓から首を突き出して四邊を見廻しやがて引込めた。時分はよしとロマノフは窓から忍び込んだ。窺ふて居る者のあるとも知らず「海坊主」は合財袋から紙幣の束を出して勘定し始めた。之が彼れの道楽なのである、ロマノフは背後から拔足して忍び寄つた。危い所で「海坊主」は首を上げてみた。彼れは怪漢の立つて居るのを見て膽を潰し、紙幣を袋に仕舞ふや、近所の叢の中へ逃げ込んだ、ロマノフは見え隠れに跡を尾けた。彼れの立木に倚りかゝつて「海坊主」は命より大切な札を數へ改めて居る。ロマノフは衣囊よりピストルを取り出し覗ひを定めて引金を引いた、弾は頭に中つて、ルイは一聲叫ぶや木の間に倒れた、ロマノフは敏捷く合財袋を奪つて何處ともなく逃げ去つた。間もなく此處を通り合せたのはハミルトンとレオンティンを乗せた自動車であつた。

「何でせう？」と、レオンティンは同乗のハミルトンの腕に手を置いた。叢の中

から人の呻き聲が聞えるのだ。負傷者を発見したハミルトンは後から来たレオンテインを顧みた。

「おや！これはルイ、ラムさんです」と、レオンテインは思はず叫んだ。

「多分誰れかに撲られたのでせう、兎に角宿へ連れて参りませう」と、ハミルトンは言ふた。

「お宿よりは妾の宅へ連れて参りませう」と、レオンテインは何時になく反対した。

「しかし、奥さん、それは」

「いやかまひません、妾の宅の方がよう御座います」

二人は負傷者を自働車に乗せて、レオンテインはスカートの紐で繃帯してやつた。彼れの胸の鼓動は高まつた。

「海坊主」を宅へ連れて行けば再び自白書を書かせる機会が来るかも知れない。そうすれば終生の事業たるヂヤリーの冤罪を雪ぐ事も出来る譯だ。セヴァスチアンの

歸宅したのは、レオンテインより遅かつた。彼れは家の中が何となしに落ち付かぬを見て、レオンテインの居間へ急いで行つた。彼女の腰かけて居る側の長椅子の上に一人の男が横はつて居つた。

「ハミルトンさんの方は變りなかつたかね」と、云ひつゝ近寄つた。彼れは遽然として立すくみ、自分の眼を睜つた。

長椅子に横はつて居るのは自分の舊悪を知つて居る共犯者のルイである。彼れが恐れ戦きつゝ凝視して居る時にルイは眼を見開いた。両者は暗黙裏に互に合點した。

第三卷 千五百弗で遂に……

レオンテインが室を出て行くと、二人は顔を見合はせた。

「あゝセヴァスチアン、ナヴァル氏ですか、其の後は御無沙汰致しました」
セヴァスチアンに取つては御無沙汰の方がよいのだ。

「チャリー、カーゾンに貴君が金を貸したといふ偽證文を書いた事もありませんつね。

セヴァスチアンはいきなり、飛び付て捻ぢ伏せてやらうと思つたけれども手は徒らに戦くのみであつた。此の前會つた時にルイは自分を知らぬといふたのに、今度は昔の事をよく覚えて居る。誠に不思議な事だ。處が實は不思議じやないのだ、ルイは「歡樂閣」の火事で腦を傷め記憶を失つたけれども今度ピストルに撃たれた爲めに衝動を受けて却つて記憶を回復したのだ、ルイはよろ／＼と立上りセヴァスチアンを押し除けやらうとした。

「無禮者奴！手を離せ、貴様は僕を押し出す権利はない」と、云ひながらセヴァスチアンは彼れを突き飛ばした。丁度其の時レオンテインが這入つて來て出合頭に止めやらうとしたけれども「海坊主」は廊下の方へ委細かまわず、よろめいてやがて入口の戸を開けて戶外へ行つて仕舞つた様子であつた。セヴァスチアンとレオンテイン

は互に顔を見合せたのである。

「お前はあの男から何か聞いたかね」と、訊かれた。レオンテインは静かにうなづいた、

「あの野郎おれは知らない男だ、何だと云ふのか、皆な嘘だ」と、セヴァスチアンは辻褄合はぬ事を口走つた。彼れはレオンテインの顔を偷見た。一語も發しない。彼れはきまり悪げに後退りしつゝ、室の外へ出て行つた。獨り室に残されたレオンテインは両手を顔に當て、沈思するのであつた。どうして證據を上げてチャリーの罪名を拭つてやらなければならぬと。一度室の外へ出た、セヴァスチアンは引返して來てレオンテインに向ひ、

「ね、レオンテイン。お前と私の結婚は畢竟誤りであつた。機會があつて私が別れ話を持ち出したらお前は同意するかい」

レオンテインは顔を上げて稍暫らく黙つて居つたが、

「若し貴君が罪を白状して、チャリー、カーゾンの冤罪を雪いだすなら何時でも離婚に應じます」

セヴァスチアンは恐怖と憤怒の相すさまじく室を出て行つた。

「今朝、君は僕を見掛けたつて？え？」と「海坊主」はハミルトン氏の助手アヴェリーを驚ろいた風でみた。

「嘘だらう。今朝なんか君に會ひはしねいよ」

「何だつて「海坊主」！そんなに白つばくれるなよ、それ飛行場で君に遭つてさ、言葉をかけたからお前なんか見た事もないと云つてすん／＼行つて仕舞つたじやないか」

「解らん、僕は腦が悪かつたんだ、誰れかト撲り付けて袋を持って行つて仕舞つた何だかさつぱり譯が解らん、それはそふとアヴェリー君に相談がある

兩人は格納庫の番人室へ這入つて行つた。

「海坊主」何用だか聴かして呉れ、僕は早く眠らなけりあならんのだから」

「ナヴァル夫人が君の主人と乗るといふ話だがほんとうかい」

「乗るかも知れん。又乗らぬかも知れん。處で君の用から云つて貰はう」

「若しハミルトン氏が急に病氣にでもなつたら君が代りに乗るのだらう」

「多分乗る様になるだらう。處でどうしたといふんだい」

「處でだ、上へ揚つた處で故障が起きたとする。假りに氣囊が火を發した様の場合には君はパラシュート（避難傘）で直ぐ無事に下りてくる事が出来るだらう」

「それがどうしたと云ふのだい」

「二人一所にパラシュートで逃げる譯には行くまい、そうするとナヴァル夫人は生不動よろしくといふ態で天降る事になるだらう」

アヴェリーは此の時起ち上り相手をキツと睨んで

「君は何の目的でそんな事を訊くのか」

「海坊主」はポケットの紙入から紙幣五百弗抜き取りアヴェエリーの手に握らせて

「これを取つて置き、後でまたやる」

アヴェエリーは蒼白になつて紙幣を机の上に置き、

「出て行け！」と、怒鳴つた。

こんな事で凹む「海坊主」ぢやない、彼れは更に五百弗を出して机の上の五百弗に重ねた。

「そら倍にした。もとは金の仕事となると直ぐ賛成する男だつたがなあ。よもや變りやしめい」

「だつて……」

「誰れも知つて居るものはない。風船を揚げるのは君の役目だ。そこで變事があつたとする。死人に口なしだ。證據の揚る道理がねい。そうだらう」

彼れは又紙入れから五百弗を取出して前に重ねた。都合千五百弗だ、始めからこれだけやる腹であつたのだが三度に渡すのが「海坊主」の腕のある所だ。

「おい、千五百弗だせ。入用なら後からまだやる」

アヴェエリーには此の千五百弗を押し戻す勇氣がなくなつて、とう／＼往生した。

「まあ此處へかけ給へ。一體仕事といふのは何だか聽かせて呉れ」

第四卷 弱い酒ですから

夜もいたく更けたのにセヴァスチアンは思案に耽けつて居つた。處へ電話の呼鈴が鳴つた。

「誰方？」

「私はルイです海坊主のルイですが……」

「何？ルイ」と、セヴァスチアンは當惑した。

「まあ静かにお聴きなさい、奥さんはすつかり覺つた相です、處で何とかしなけりやあ私もあなたもやられますせ……ハミルトンと同乗するんだそうですね。貴君は飛行場へ出掛ける前にハミルトンを晝飯に招びなさい。そこで彼奴が病氣を起せばもうこつちのものです。後の細工は私がします、さよなら」

「何だか知らぬけれども此の際不本意ながら彼れの意に従ふ外はない！」とセヴァスチアンは思つた。

ナヴァル家へ招待されたハミルトンは、家庭内に暗流の漲つて居る事を知つて居る筈はない、

「ナヴァルさん、貴君はよく僕を信用して奥さんを同乗させて下さいます」

「その御賞讃には痛み入ります、一杯おやり下さい」

「失禮ですが御酒は御免蒙りませう、奥さんに萬一の事があつては大變、慎みませう」

「それもさうです」と、セヴァスチアンは一寸考へて、

「では此の頃アルゼンチンの親友から野生の果實から採つた液汁を送つて寄越したんですが、葡萄酒よりも強くない位だと云ふ事ですから、身體のしつかりする様にはんの一口お飲み下さい」と、云つて二杯注いでやつた、

「飛行の成功を祈ります、奥さん」と、彼は快活に飲み乾した、飛行家の顔には青春の氣が溢れた、

「中々よい味ですが少し強いですなあ」

「そうですか、それでは葡萄酒位のものだといふたのは戯言でせうか、あゝ自働車が来た様です」と、云つて出て行つた。

ハミルトンの顔は急に赤くなつて来た、

「さあもう出掛けるとしませうか」と、變な手付で、

「奥さん、いらつしやい」と、云ふたけれども、彼れの足はよろめいた、
 「べらぼうに強い酒だつたーゲツブ」と、テーブルの上へ倒れかゝつた、
 「ハミルトン、どうなさつたんです」と、レオンティンは氣遣つた。

此の時セヴァスチアンは何氣ない顔で這入つて來た、

「用意は出來ましたよ、レオンティンや、ハミルトンさんよろしう御座いますか」

「おや御氣分でも悪いんですか」

一時赤くなつた、ハミルトンの顔は蒼白に變じた。

「セヴァスチアン、ハミルトンさんは病氣よ」と、彼女は直ちに夫を疑う眼を光らせて、

「床の方へ連れて行つて下さい」

「だ……大丈夫」と、云ひながら又倒れかゝつた。

セヴァスチアンとレオンティンは彼れを長椅子の上へ横へた。

「醫者へ電話を、電話を」と、レオンティンが連呼したのでセヴァスチアンは電話の方へ去つた。

レオンティンは床の傍に跪いて、

「どうしたんでせう」と、おどく／＼して居つた、

「さ……酒です。セヴァスチアン君の誤りではない、ほ……僕を憎む競争者の

……ア……細工……ウ風船はどうした」

「風船は決して心配ありません、ハミルトンさん」と、レオンティンは泣き出さん許りだ。

床上のハミルトンは幾度か起き上らんとした、外ではセヴァスチアンが電話をかけて居る音がする、

レオンティンは考へた。これは夫が故意と強い酒を飲ませたに違ひない。何が故に彼れを害したのか。勿論妾に離婚を要求して居る今日、決して嫉妬の爲めでない

事は判り切つて居る、

「奥さん、若し、僕が行けぬなら、あなたは、私の助手アヴェリー君と同乗して下さい、どうか必らず誓つて下さい」

「貴君が乗らなければとても乗れません」と、レオンティンは云ふた、

「そう云はないで、どうかノ、直ぐ出掛けて下さい。一生の御願です」

「それならば乗りませう」

「僕も最う大丈夫になりました。さあ一所に………参りませう」と、身を起しかつた

「馬鹿な事を」と、此の時這入つて来たセヴァスチアンは制して、

「ハミルトンさん、もう少し快くなるまで養生しなければいけません」

ハミルトンは長椅子に倚りかゝつて、首を振つた。

「いや、風船に乗ります」

「乗つて私の妻を殺さうといふのですか。それなら問題外です」と、詭辯を弄した

「時間が来ました」と、飛行家はレオンティンに訴ふるが如く、

「此の競争者にはどうしても勝たなければならぬ、奥さんどうか、アヴェリー君と乗つて下さい。誓つて下さい」

悲痛の色がレオンティンの顔に浮んだ。夫の密謀の爲め、むざ／＼此の飛行家の志を空しくするのを惜んで、

「必らず乗ります。そして勝ちます」

「それで安心」と、青年は喜んだ。

「お前はあの風船で登らうといふのか」と、セヴァスチアンの間に對して、レオンティンは只決然と「はい」の一語を酬いた。

彼女の眼には夫を卑すむ色があり／＼と見えた。セヴァスチアンは肩を聳かして出て行つた。

入れ違ひに這入つて来たのはセヴァスチアンの懇意の醫者である。彼れは病人をザツと診て、

「此のお方は何か食べあたりでもなさつたんですな」

「嘘です、ハミルトンさんは劇薬を飲ませられたんです」と、レオンティンは言ひ放つた。

醫者は此處ぞと許りニヤ／＼して、

「奥さん、劇薬の爲めだか又それでないか貴女が一番よく御存じの筈です」

成程、自分は主婦である。主婦は膳部に就て全責任を負ふべき筈だ、それに又此の上探索すれば勢ひ夫の罪を曝さなければならぬので、口を噤んだ。

彼女は又夫と醫師との間に目配せの通ふのをみて此の上争ふも無益と感じたからでもあつた。

「僕は出掛けて乗る」と、又もハミルトンは夢中で云ふた、レオンティンは決然たる口調で、

「ハミルトンさん。妾はこれから貴君をお宅へお届けした上でアヴェエリー助手と同居します」

第五巻 風船に乗つたは誰れ

レオンティンの決心は毅然として動かなくなつた。セヴァスチアンは此の通りに事が運べば「海坊主」が注文した通りだと、ハミルトンが自働車に乗せられて宅へ行くのを見送つて莞爾とした。

レオンティンが飛行場へ到着するや、アヴェエリー助手は笑顔で以て彼女を迎へ風船の下に案内した。瓦斯を孕んだ氣球が幾個ともなく列をなして今や上昇の號令を待つて居つた。時間がおくれたので助手は急いでレオンティンを輔けて繩梯子を登つて吊籠へ這入つた。

下を見れば幾萬の觀衆は潮の如く押寄せて居る。彼女は直ぐ眼下にセヴァステア
ンがさも馴れ／＼しげにビアンカと喋り合つて居るのを見て思はず身をふるわせた
先日離婚を云ひ出した理由はこれだと感付いた。

彼女はアヴェエリーが自分をみて居るのに氣が注いだ。ジーツと自分の顔に思ひ入
つて居る。何だかみた事のある眼に似て居るけれども考へ出されない。こんな時常
に想ひ起すラヴエンガのそれではなからうかとも思ふて見たが、いや／＼

群衆を押し分けて近寄つて来た男はと見ればそれは「海坊主」のルイであつた。
今し繫索を調べにコンドルから降りて来た、アヴェエリーに何やら話しかけたけれど
も何とも返事が無いので、口を尖らして顔をのぞき込んで一寸怪訝な様子をした、
而し、それは物思ひに耽つて居つたレオンテインにはみえなかつた、操縦者は頓着
なく又登つて来た。

かくする間にセヴァステアンが群衆の中から、

「レオンテイン！」と、呼んだ、彼の顔には悔恨の色が見えた。

「レオンテインや、お前は止したらどうか」

一人の孔雀の様に着飾つた婦人が近寄つて来た、ビアンカである。セヴァステア
ンの面上の悔恨の雲はビアンカをみるに及んで消えた。彼は妻にキスを與へて、
「それでは氣をつけて」の一語を饒別て彼女を永遠の旅に離し遣るのであつた。

「皆、離れて下さい」と、航路案内者が云ふと、數個の風船の繫索は一齊に解かれ
碧空を見かけて静々と昇り始めた。喝采は鯨波の如く起つた。帽子も冠らず、上衣
も着ず、取亂した。一人の青年が息を切つて、ハミルトンの格納庫から驅け出して
来て「あれ／＼！」と、呼びつゝ「海坊主」の傍へ来た。

風船に乗つて空へ昇つたと思つて居るアヴェエリーが此處に又一人現はれた、こう
なると何れが眞物だか判らなくなつた。

「やつぱり君が本當のアヴェエリーだ」と「海坊主」は顔を穴の明く程みて言ふた。

「それちや風船に乗つて行つた野郎は一體誰れだ」

「僕だつて判るものか。一時間前に僕が室で支度して居ると見た事のない一人の男が這入つて来て、いきなり僕を撲り倒し、猿轡を箠めて柱へ縛り付けて出て行つた今漸く繩を解いて来た處だ」

「貴様の様な間抜け野郎はねい、計畫が滅茶々々になつて仕舞つた。此の間やつた金を返せ」

「返す必要はない。仕事はうまく行くせ」

「うまくゆく。どう云ふ譯で」

「爆裂弾は籠の下に隠してあるのだ、それで今晚の八時半に爆發する仕掛になつて居るよ。それなら文句はあるめい「海坊主」

歡呼に送られて昇つたレオンテインは籠の縁から遠ざかり行く下界を眺めて、其の雄大なる光景にうつとり見惚れるのであつた。

群集の歡呼の聲は次第に幽かに、黒かりし帽子の波もやがて模糊の間に薄れて行つた。

伏して眼を放てば、遠近の町や村は傾くピンク色の光を浴びて、きら／＼閃くのは教會の尖塔でまあらう。道はリボンの如く、緑滴る森や、黄色に霞む野に宛つて行く。仰げば綿の様なちぎれ雲が漂ふて居つた。

同時に繫索を斷つた氣球は如何にと見れば、日光を浴びてきらめきつゝ碧空を東南の方へ海岸指して飛び行くのである。

レオンテインの乗つた船は先登に立つた。先程より一語をも發しない、操縦者は依然として風速計と高度計に親しんで居る。彼れの技術は慥かなものである——見たレオンテインは心に一點の恐怖も覺えなかつた。

やがて砂囊は投げ始められた。更に上昇して好氣球に乗せん希望であるらしい。最後の氣球を地平線近くの霞の中に尻目にかけてつゝ飛び行くのも又一一大快事に相違

ない。

操縦者は折々レオンテインを見たけれども一語を發しない。レオンテインも亦安心して身を托した。氣球が上昇するに従つて雲が眼下を飛び行く様になつて時には展望を遮る様な事もあつた。

心静かなる彼女の胸に徂徠するものは、過去未來の事であつた。若し何とかしてセヴァスチアンから自白書を得たなら、決してそれは裁判に持ち出さない。只草葉の蔭に無念の涙を呑んで居るチャリーに手向けて罪を雪いでやらう。そしてセヴァスチアンとは綺麗に別れて、アルゼンチンに歸り、曾ては甘き戀を語りし思出多き土地に暮さう、などと、思つた。

第六卷 パラシユートで海へ

日は西へ静々と傾いて行く、氣球は薄紫の夕空を一つく、眼界を離れて消えた

夕焼が地平線を紅に染めたのも束の間、やがて日の神は彼方の世界に没しルビイの様な星が一つ二つ見え初め、鏡の様な月が東の空に上つて来た、

「愉快ですか」と、此の時始めて操縦者は口を切つた。思はず涙の露が頬を傳つて落ち、レオンテインは答ふる事が出来なかつた。懐かしのラヴェンガーか、但し又助手のアヴェリーか！と思ひ迷ふた。忽ちにしてレオンテインは操縦者の顔色の昏ならぬに氣が付いた。彼れは何やら吊籠の底の方を調べて居つた。一株の煙がそこから吹き出して居るのだ、彼れは吊してある消火器を執つて水を注いだ、煙は一時失くなつたが、今度は數ヶ所から吹き出して籠の底一面に廻つたらしい。今は炎すらチヨロ／＼見えて来た。消火器の水はもう盡きて仕舞つた。

操縦者は狂へる眼を上への氣囊に注いだ。水素瓦斯は下の熱を受けて著しく膨脹して恐るべき勢ひで上昇して居る。

「もう十五分で破裂します」と、叫びつゝ、彼れは避難傘を取つてレオンテインに渡

した。

「これで安全に降りられます、決して離してはいけませんぞ。解りましたか。さあ飛び下りなさい」

そして籠の縁にレオンテインを誘ふのであつた。火は今や全體に燃え擴つて來た下を見れば密雲下界を鎖して、死の神が待つて居る様だ。さりとて此の儘止まれば死の神の犠牲となるより外ない。

「飛べ！」と、一聲叫ぶや、レオンテインは落ちた、其の刹那、操縦者は綱を引いて瓣を開いたので、氣球はレオンテインを掠めて急下した。レオンテインはパラシユートを持つた儘矢の如く落下して今度は氣球を掠めた。空氣の抵抗がパラシユートを開いたので、レオンテインは羽毛の如く飄々乎として空に舞ひつゝ降り行くのだ。彼女は降下しつゝも操縦者の運命如何と見上げた。炎に包まれた籠の中に彼女は毅然として立つて居つた。雲の切れ間から下を見下すとそこは海であつた。

海！海！空で救はれても更に恐るべき海が待つて居る。異様の音と共に、俄然パラシユートの笠は上の方へ折れて海上に墜落した、落下の勢ひで一度水の中へ沈んだけれども、パラシユートはキルクの如く浮み上つて彼女を水面へ持ち上げた。渺茫たる蒼海原にパラシユートに縋りつゝ彼女は運命を待つのであつた。空には火を發した氣球が降下しつゝあつた。と見る間に一團の火炎が現はれて氣球は遂に爆發した。操縦者の運命は？彼れは一條の綱を垂下してそれに縋つて居つた。そして爆發と共に二百尺の高處から海面へ落された。落された個所はレオンテインの漂ふて居る所から數間しか隔つて居なかつた。一度沈んで彼れは、やがて浮き出して來たレオンテインは非常な努力を以て彼れを自分のパラシユートにつかまらせた。此の騒ぎで操縦者の口髭が落ちた。假髭であつた。

讀者諸君の想像通り果してラヴエンガーである。兩人は相顧りみて笑つた。

第八篇 世のどん底

第一卷 貴女の貞節に惚れた

「海坊主」のルイがセヴァスチアンを訪れて渡した新聞記事の切抜に、一氣球の遭難に際し乗組の男女二人が燈臺看守ムツクツリに救助せられたと記載してあつた。「奴等に違ひない」と、ルイは切抜を受取ながら云ふた。

「實に困つた事だ。何時になつたら奴等を片付ける事が出来るだらう」と、セヴァスチアンは溜息した。

「どう考へても奥さんとあのラヴェンガーですあ。私が仕掛けした通りに發火彈が爆發して氣球が焼け落ちたのですけれど、どうして助かつたんでしやう。どうして

も死なゝい所を見るとあれは仙人ですせ」

「處でお前に頼みたい事があるんだが彼奴等の行衛を調べて貰ひたいもんだが」

「それあ、レコと相談の上ですあ」と、海坊主は指で輪を作へて見せた。セヴァスチアンは懷中から百弗紙幣五枚抜き取つて渡しながら、

「ではしつかり頼むせ。それから彼奴等を片付けるうまい方法があつたら直ぐ忘れないで電話をかけて呉れ」

こういふたもの、セヴァスチアンの心中にも良心は宿つて居つた。彼れは他に婚約あるレオンティンを我者にしやうとして證書を偽造し、チャリーを陥れやうと謀つたけれども、見事失敗に終り加之弟は誤つて死んだ。彼れは更に弟の死はチャリーの所爲として裁判官を買収し、彼れを永久の獄に陥れた。そしてレオンティンの父の財政困難を救ふを名として、彼女を名義丈けでも結婚せしむるに餘儀なきやうに到らしめたが、結婚後は先の約束を無視して常に迫害を加へて來た。と

どのつまりは離婚を言ひ出したけれども今度はレオンテインの方で舊惡を自白せぬ間はそれに應せぬために、一層一思ひに彼女を亡きものにして、ビアンカと新生涯を樂しまうと企てた。殘忍なる彼れにも少しは心に痛みを覺えるのである。若し又レオンテインを、うまく殺した處で此の蛇の様に着き纏ふ「海坊主」の生きて居る間は、枕を高くして眠る事も出来ない、こんな思ひに惱まされて居る時に彼の眼前には濃艶なビアンカの姿が浮んだ。そうだビアンカと遠い所へ行つて、全く新しい生涯を營まう。それが上分別だ、と考へて彼は支度もそこへ出て行くのであつた。ビアンカに至つては、夜も日もラヴェンガの事を思ひ續けて居た。彼れは一種の魔力を以てビアンカの心を奪ふて居たので、ビアンカは曾てない戀の暗に迷ふのであつた。彼女は思ひ切つて心中を明かしたけれども、強くはねつけられた。それでも煩惱の犬は益々狂ふた。

彼女は恥も外聞も忘れて最後の心事を明ける爲めに穴倉へ下りて行つた。ラヴェ

ンガーは何處へか消えて仕舞つて影もない。二重にも、三重にも錠を下して置いた處からどうして逃げ去つたか。彼れは乾兒共を召集して、彼等の不注意を罵つて居つた。其の時である。セヴァスチアンの訪れたのは。忽ちにして彼女の心は冷靜に歸つた。利害打算の強い彼女の理性は感情を制して仕舞つた。成程ラヴェンガーは戀しい。しかしこれ迄傷けられた事のない自負心を犠牲にしてまでも彼の愛を求め理由がどこにあるか。それに引換へセヴァスチアンは自分の一瞥で掌中の者とする事が出来る、のみならず巨萬の富を持つて居る上に社會に出て立派な紳士だこれは牛を馬に乗り換へた方が得策だと感付いた彼女は満面に嬌笑を漂はせてセヴァスチアンを歡待するのであつた。

「僕には心配がありません」

「どんな心配？聽かして頂戴な」と、彼女は顔を擦り寄せた。

*

*

*

*

燈臺守に救はれたラヴェンガー、レオンティンの二人は燈臺の下の圓い室に對座して疲勞を休めて居つた、外を見れば海は荒れ出して來て鷗の鳴く聲も寂しかったけれども、ラヴェンガーの傍に在るレオンティンは無限の心強さを感じた。若し彼女にチャリーなる意中の人なかりせば、或は此のラヴェンガーを戀したかも知れぬチャリーに對する心は戀愛である。

ラヴェンガーに對する心は敬愛である。

ラヴェンガーは突然レオンティンの手を握つて、

「ナヴァル夫人！ 貴女が私を信賴して下さる事を感謝します。私は貴女の御身の上をよく存じて居ります、彼れは已むを得ず或る人に名義丈けの結婚をなさつた貴女は皆謀に陥つたんです」

レオンティンは涙を流して、

「妾のたのみとするのは貴君許りです。妾はいつも貴君の御親切を感謝して居るんです」

です」

「御親切？ 奥さん、私は貴女に對して單に親切位では満足しては居りません。私は貴女を戀して居るんです」

レオンティンもラヴェンガーが自分に對して身を捧げて呉れる心の底を汲まぬではなかつた。しかし彼女は靜かに握られた手を引いて、

「ラヴェンガーさん、貴君は妾が名義丈けにせよ人妻である事を御存じの筈です。

それに妾は尙重大な使命を帯びて居るんです、チャリー、カーゾンの名を清めるといふ……それで其の使命を果すまでは、セヴァスチアンと離婚する事も出来ないのです、それはセヴァスチアンの自白を置いて他に證據がないからです、妾は只それが爲めに生き長らへて居るのです、チャリーの冤罪を清める事が妾にとつては生命より大切な事なんです」

聽いて居つたラヴェンガーは黙する事稍しばらくであつた。

「レオンテインさん、私は貴君が死んだ戀人に捧ぐる貞節に惚れたんです」
此の言葉を眞實に解る人はラヴェンガー其の人のみであらう。

第二卷 燈臺の下敷になつて

兩人がかく話して居る間にレオンテインは窓の處を見て思はず叫聲を發した「海坊主」のルイの顔が現はれたからだ。

ラヴェンガーは窓から顔を出して見た。何も居ない、

「セヴァスチアンの廻し者です。妾共を尾けて來たんです」と、レオンテインは急ぎ込んだ。

ラヴェンガーは飛び出して岩の上を走りながら搜したけれども人影はない。只磯打つ波の音のみ高かつた。

「多分疲れたから神経のためでしやう。誰れも來る筈はありません」

燈臺へ歸つて來たラヴェンガーはかく云ふた。彼れは色々慰めたけれども、レオンテインは慥かにルイの顔を見たと思つて、胸中の不安を消す事が出来なかつた。

暴風雨は益々烈しくなつて來て。雷鳴と浪音は兩人の話を遮つた。風雨の間には、

電が光つて、サーチライトの如く夜の燈臺を照した。レオンテインの見たのは幻

影ではなかつた。正しくルイである。ルイはセヴァスチアンの命をうけ、小さいボ

ートで陸から此の燈臺の在る島へ風波を乗り切つて來たのだ。彼れは磯の窟にポー

トを引き上げ、そして燈臺の窓から中を見て驚ろいた。目指す二人が此處に居り、

おまけに二人は手を執り合つて居る。其の時一道の電光が暗を劈耳いてルイの姿が

現はれた。彼れは見付られたと思つたので窟の中へ逃げ込んで砂上に伏しラヴェン

ガーの行過ぎるを待つた、やがてラヴェンガーも歸つた様子なので顔を擡げた。風

伯は益々威を逞うして來た。ルイは食物の準備もせず來たので今晚此の濱に夜を

過ぎなければならぬと考へると元來が臆病な男なので心細さを感じた。ビリ／＼と

耳も聳せん許りの響がして雷が落ちた。ルイは自分の首を撫で、見た。慥かに附いて居る。彼れはおづく外を見た。燈臺の上部が破壊され海の中へ拂はれた。雷は燈臺へと落ちたのだ。

ルイがビク／＼もので外の様子を見て居る時に又もや地雷火の破裂する様な音響と共に落雷して燈臺の全建物はルイの居る方へ傾いて来た。彼れは一目散に逃げ出すとがらく／＼と崩れて仕舞つた。此の時が暴風の頂點であつた。風伯は今や燈臺を打壊して満足せるもの、如く凱歌を奏して次第に引上げた。恐怖と奔走に疲れ切つたルイは、窟の中で猛獸の様な餌をかいて眠に陥つて仕舞つた。彼れが眼を覺ました時には太陽は昨日の暴風を知らざるもの、如く名残に狂ふ浪の上をキラ／＼と照らして居つた。彼れはアーンと欠伸をして眼を擦りながら燈臺の方へ行つた。昨日まで轟然として此の巖上に聳え、幾多の行き迷ふ船の指針となつた燈臺は、哀れ落雷の爲めに崩壊して悲惨な光景を呈して居つた。最下層の室のみは残つて居つたけ

れども、崩れた材木に押し潰されて彼等が此の中に生きて居やうとも思はれない。彼れが検べ廻る中に燈臺看守夫妻が崩れた材木の下敷となつて惨死して居つた。

どの道、ラヴェンガー、レオンティンも助かつて居る道理はない。此の世の中で一番恐い二人は死んで仕舞つたと思ふと、氣も暢々して、微笑を禁ずる事が出来なかつた。彼れは其の日の午後、浪の少しく穏かになるを待つて、本土に漕ぎ行き、ありし次第を報告すべくセヴァスチアンの宅へ急ぎ行つた。

「お前は慥かにラヴェンガーと妻の死骸を見届て来たと云ふのか」と、セヴァスチアンは念を押した。

「それあ旦那、慥かも／＼現在このルイが見た以上は間違ひはありません、彼奴等二人は一しよに燈臺の下敷になつて死んで居りました」
自分の想像をとう／＼事實に造らへ上げて仕舞つた。

「随分慘憺たるものであつたなあ」と、セヴァスチアンは私語いた。こうなつては彼れも多少の感慨なき能はずであつた。そしてアルゼンチンに居つた彼女の少女時代など思ひ浮べて心は沈み込んだ。

しかし其の事もビアンカの事を思ひ出すと忽ち消えた。レオンテインが死んだ以上自分は自由の體になつたのだ。ビアンカと公然夫婦になれるのだ。勿論彼れと雖もビアンカが自分の財産に惚れて居る位の事は知つて居る。併しどんな毒婦でも愛情と柔和を以て御すれば、善良な婦人に改める事が出来るといふ意見を信じて居つた。又婦人側から云はせれば、男も亦此の如しと云ふだらう。

「ルイさん、僕は失禮ぢやが一寸出掛けて来る。まあゆつくり寛ろいで一服喫つて居つておくれ。僕は一二時間経つと歸つて来る。其の上で又細かい相談をしやう」と、云つてセヴァスチアンは出掛けた、ルイは脚を長くして休息するのであつた。

第三卷 結婚は中止だ

ラヴェンガーとレオンテインさへ此の世を去れば、もう恐ろしいものはない。それにセヴァスチアンに頼まれた事はうまく成就した。愈々おれも有卦に乗つたなどひとり笑臺に入つた。セヴァスチアンは氣も浮々と足も軽くビアンカを訪れた。

「ビアンカさん、漸く厄介拂ひしましたよ、妻は災難に遭つて死んで仕舞ひました貴女は私と結婚して下さるでしやうね」

ビアンカはしばし無言で居つた。彼女の胸裡に徂徠するものはラヴェンガーの雄姿である。彼れの超自然的偉力である、ラヴェンガーに對する心は無垢なる愛である。セヴァスチアンに對する心は醜穢なる利である。今愛と利の争闘が彼女の心中に起つた。そして勝つたのは利であつた。

「妾は貴君の妻となります」と、云ひつゝ身を托した。セヴァスチアンは幾度も幾

度も接吻した。正に沸騰點以上の熱度である。

甘い戀に酔ふて居つたビアンカは忽ちにして驚異の眼を見張つた。

「アレ！御覽なさい」

セヴァスチアンも驚ろいて彼方を見た、二つの眼と白い一本の手が出現した。眼は炎の如く輝き、手は威嚇するものゝ如く動いた。兩人共覺えのある「怪しい物」だ。セヴァスチアンは女の前としても勇氣を出さぬ譯にはゆかない。手近の椅子を手にするや猛然として「怪しの物」を撲つたけれども、其の時は既に消えて影形を留めなかつた。男の側にすり寄つたビアンカは、

「どういふ譯でしやう」と、慄へながら私語いた。

「解らん」と、セヴァスチアンは答へて、

「どの道、今迄害を加へた事がないから恐ろしいものではない」と、繼ぎ足した。「それでは貴君は前に見た事があるんですね」

「貴女もでしやう」

兩人は期せずして過去の物凄き光景を想起するのであつた。

セヴァスチアンの宅で待つて居つたルイは、とうとう待ち勞れて宿へ歸つて仕舞つた。其の次の夜の事、ルイはセヴァスチアンより一通の手紙を受取つた。それはビアンカとの結婚の招待状であつた。

「へ………多分こんな事だと思つて居つた。轉んでも只起きない奴だ」

しかし、招待状を寄越す所を見ると、此の間の仕事に對する報酬は充分呉れるに相違ない。内心ホク／＼もので彼れは煙草を燻らせつゝ室の中を彼方此方と歩いて居つた。此の得意の状態は、室の隅に現はれた眼と手とを見るに及んで破壊されて仕舞つた。

二つの眼はグリ／＼と動いて睨みつけた。手は彼れに向つて拳を固めた。ルイは勇を鼓してそれに近付き力をこめて撲り付けた。何もない。消えてしまつた。只壁

に打付けて指を負傷したのが儲けものであつた。彼れは自分の神経の爲す業と自らを嘲けて居つた。又しても一度消えた手が現はれた。今度は眼は出なくて手許りだ。其の手はテーブルの上の招待状を取り上げて何やら書いた。

若しセヴァスチアンとビアンカと結婚の曉には爾の命あらざるべし
恐ろしい宣告だ！糞こんな物に負けてなるものかと彼れは其の紙を手の中に丸めて仕舞つた。

これで治まればルイの神経の業であつたかも知れない、しかし此の時又一本の手が現はれてルイの襟首を掴んで投げ飛ばした。若し予の言を信せぬに於ては眞に汝の命をとるぞと云はぬ許りの見本を示した様なものだ。彼れは起き上らんとして空中に動く手を見た。それは嚴然として、状袋の表の文字を指すのであつた。

セヴァスチアンとビアンカとの結婚當日となつた。知己の紳士淑女は今や盛装し

て教會へ練り出す所であつた。不參者の中にルイもあつたけれども誰れも氣になかつた。今や一同は出掛けやうといふ時飛び込んで来たのはルイである、禮装でもして來ると思ひの外、彼れは不常着の儘でおまけに室へ這入つて來ても帽子も脱らない。

「貴方達二人の結婚は此のルイが不承知だ」

とんだ横鎗だ。不禮者と思つたがセヴァスチアンは平氣を裝つて、

「それは又どう云ふ譯かルイ君」

「どうもこうもあるものか。たつてお前達が結婚するといふなら、何もかもさらけ出すぞ。第一貴様は欺偽師だ。牢へ行かなきあならぬ身だ」

貴方達がお前達となり、とう／＼貴様と變つて來た。

第四卷 窮鼠却つて猫を

ルイは顔を突き出して詰め寄つた。

「ルイ君、一體どうしたといふのだい、薩張り譯が解らんじやないか。悪い事は云はぬ一先づ宅へ歸り給へ」

「大きなお世話だ。お前達は結婚しちや不可」

これを聞いたセヴァスチアンの怒は勃然として發した。彼れはルイの咽喉首を掴んで押し倒した。

「さあ、こんな馬鹿者にかまわんで出掛けましようよ、貴方」と、ピアンカはセヴァスチアンの手を執つた。

けれども、セヴァスチアンは動かない、

「大丈夫よ、こんな奴が何が出来るものですか」と、又もや促した。

「此の野郎は何をしでかすか知れない」と、セヴァスチアンは先刻の「牢へ行く身」といふ言葉を思ひ出した。

此の時ピアンカは心に決するものがあるが如く、傍の乾兒に合圖した。蛇の途は蛇といふ比喩の如く、その合圖が自分を殺して仕舞へといふのだとルイは直ぐ感付いた。

ピアンカはルイに向つて、

「お前の云ふ事は全くか。若しセヴァスチアンさんが妾と結婚するとあの方を牢へ入れると云ふの」

「其の通りだ」と、ルイは答へた。

此の時二人の男がつかくとルイの傍へ寄つて来て無理に兩腕を引張つて、例の秘密戸の方へ連れて行つた。

一人の男が手を放して戸を開けて居る間にルイは拳を固めて他の方の男の顔を撲つた。そしてピストルを取出すや、もう一人の男を眞向から射倒した。

此の隙にルイは戸を潜つて次の室へ逃げ込んだ、これはピアンカの居間である、

彼れが戸の把手に手を掛けた時に追ふて来たセヴァスチアンに捕つて仕舞つた、ルイは今や死物狂である、彼れは滅茶苦茶にセヴァスチアンを殴つて窓から飛び降りやうと窓框に足をかけた、其の時一同のものがドヤ／＼と此の室へ這入つて来たが其の中に這入つて来たビアンカは此の有様を見るや、手を伸ばして一つの釘を押した。

ルイの登つて居つた窓の外の鐵の扉が轟然と閉ぢた、電氣仕掛の戸であつたのだ。もう一寸か二寸首を前に出して居つたら彼れの首は宙に飛ぶ處であつた。

「さあ、殺つてけろ！」と、ビアンカは凜然と命令した。

ルイは脱兎の如く一番近くに居た一人の男を手に取るや、自分の周圍から突き付けた數挺のピストルを防ぐ楯として身構へた。

これは名案だ。ピストルを突付けた連中も引金を引けば味方も一しよに殺さなければならぬと躊躇した。

ルイと掴み合つた男とは共に床に倒れて凄まじい格闘を始めた、上になり下になり恰かも猛獸の様な争ひだ、こうなつては尙ほピストルを發する事が出来なくなつた。

二人は組みつゝだん／＼室の中央の例の陥し穴の上の處へ来た。丁度ルイの方が其の上へ先に上つた。

頃を計つて居つたビアンカは綱を引いた、ルイは一も二もなく落ちて仕舞つたと思ひの外自分は辛ふじて縁に手を掛けて飛び上り、代りに相手の男を突き落した。

彼れが立上つた時に片眼は腫れ上り、血は處々から流れ出た。

穴へ落ちるのは免れたが、更にピストルの包圍をうけた。どの途逃れる事は出来ない、ビアンカの「撃て！」の命令を待つ風前の燈火だ。

ビアンカは片手を舉げて石像の如く突つ立つて居る。其の手が下に下りるのが、「撃て！」の命令だ。彼女は猛獸が其の獲物を探る前に嬉戲る様に、ルイを見てカ

ラ／＼と笑つた。

ルイは壁を背にして鎗襖ならぬ銃襖に面した、絶對絶命とは此の事である。千に一つ處か萬に一つも逃れる途はない。所が萬に只一つ逃れ途が見えて来た。

蒼白い一つの手が空間に現はれて、此の室の電燈のスキッチに近寄つて来た。彼は恐ろしさを忘れ、寧ろ興味を以て、ビアンカの發射の合圖と、怪しい手のスキッチを捻るのと何れが早いかを見て居つた。

カチンと音がして室が眞闇くなつた。續いてピストルが一齊に暗に響いた。

彼れは秘密戸を潜つて廊下に出るや、そこに伏して追手の行き過ぎるを待つた。

彼れは此の儘歸ればセヴァスチアンとビアンカの結婚は済むだらう。そうすれば自分は前夜現はれた「怪しの物」に殺されなければならぬ。又追手と戦ふも命はない。

何れにしても生命はない、彼れは寧ろ後者を撰んで勇戦して死んだ方が増した。

これこそ窮鼠却つて猫を噛むと云ふ事だ。

彼れはこう思つて手を揮つた。血は迸つて白い壁に飛び散つた。

第五卷 十三階の天空で

追手が賭博室の方へ馳つて行く間に、セヴァスチアンは室々々を檢めた。一生懸命な場合だ。

ビアンカにとつては只自尊心を傷けられた復讐に過ぎんけれども、セヴァスチアンにとつては自分の死活問題だ。

彼れは廊下に鮮々しい血の送りかゝつて居るのを認め、ルイの逃げた方向もそれに依つて察した、

果してカーテンの蔭にルイが潜んで居つた。見出された窮鼠は猫に飛びかゝり手早くカーテンを引き裂いて、ぐる／＼包んで仕舞つた。

かくするや、ルイは罵り騒ぐ人々の聲を後にして、階段を登った。

カーテンから漸く抜け出したセヴァスチアンは、人々を呼んでルイの逃げた方を指した。一發銃聲が響いてルイの頭を掠め壁土を少しく落した。

「ピストルを撃つのをやめなさい。警官が聞き付けるではないか」と、ピアンカは制した。

猿の如くルイは梯子を登つて天窓から屋根に出た。そして天窓を閉める暇もなく屋根の縁の方へ走つて行つた。

世界に名高い紐育の大市街の雑音がオーケストラの如く彼れの耳に這入つた。冷たい外氣に吹かれたルイは新しい勇氣を得て逃走を全ふする事が出来ると思つた。

彼は逃げ路もがたと四邊を捜し廻つた。何も無い、さりとて、十三階の頂上から飛び降りるには先づ身體を微塵に碎く覺悟からしてかゝらねばならぬ。

ふと彼れの目に留つたものは此の屋根から道を隔てた彼方の家の屋根に架つて居る桁橋だ。橋と云へば大袈裟な話だが幅さがやつと四寸位しかない。飛驒の猿橋を渡るのもこれ以上の危険とは思はれない。

渡るべきか。一步踏み外せば下の敷石に頭を粉碎さるゝ許りだ。

渡るべからざるか、追手は既に天窓から出て追つて居る。

彼れは夢遊病者の如く無意識に桁橋を渡り始めた。そうであらう正氣の人間にはこんな冒険の出来る筈がない。

綱渡りと云へば間違ひない。蟹の様に横這を始めた。追手の先登に立つたのは、セヴァスチアンである、若しルイを逃がして仕舞へば自分は必然牢へ行かねばならぬ、こうなると命掛けである。彼れはルイに續いて綱渡りを始めた。

數百尺の高さで二人が綱渡りを演つて居る。此の太夫二人が首尾よく渡り了せたら御拍手喝采といふ處だが當人はそんな呑氣では居られない。

橋の中央で二人は組打を始めた。

静かに渡つてさへ險呑な所を、格闘を始めたから堪つたものでない、二人は幾度となく足を滑らしては又立直り、互に揉み合つた。

とうとうセヴァスチアンの力が勝つたか、ルイの咽喉を締め付け下へ落さうとしたのでルイは死物狂にそれを防いだ、何れが勝つにしても共倒れになるは明かだ。

追手の者共は手に汗を握つて此の光景を眺めた、中にもビアンカは氣が氣でない自分はセヴァスチアンに惚れては居ないけれども玉を失くしては財産を捲き上げる事は出来ない。

「其の喧嘩は止めにして下さい、二人共歸つて頂戴！ ルイさん貴方に決して害を加へないから歸つて下さい」

二人の耳に入らばこそ。ルイはセヴァスチアンの手を咽喉から取り離れた拍子によるくと鶴の様に片足

で立つた、兩足をしつかり開いて立つたセヴァスチアンは此の時ルイを投げ落す事が出来たらう。しかしそうすればルイが力を入れなくても反動で自分も共に落ちて仕舞ふ事は明らかだ。

その内にセヴァスチアンが又も重心を失つてよろよろとしたが辛ふじて立直つた彼はルイの足にしがみ付いた。ルイは身を屈めて頭を、杵で餅を搗く様にセヴァスチアンの胸を撲つた。

セヴァスチアンは遂に足を踏み滑らした。

第六卷 お前は死んだのに

兩足を踏み外したセヴァスチアンは急轉直下落ちる處であつたが、不思議にも片手が橋の縁に引つ掛つたので釣り下つた。彼れは他の手をもあげて橋の縁を掴み、茲に兩手で何百尺高い所で振り子の様にブラリと垂れ下つたのだ。

ルイにとつては邪魔物がなくなつたのだから直ぐ逃げさうなものだが騎虎の勢で敵を其のまゝにして置く事は出来ない。彼れは重い靴を上げて橋の縁につかまつて居るセヴァスチアンの手を踏み付け始めた。

幸にしてルイは身體の調子をとる爲めに足に充分の力をこめる事が出来ないの、で其の割には痛くはなかつた。セヴァスチアンはルイの靴を除ける爲めに片手づゝ交るゝに離して吊り下つて居つた。

ルイの足は輕業師がよく自己催眠にかゝる様に自動的に動くに過ぎなかつた。彼れは見當の外れて居るにも係らず一生懸命で踏み付けて居つた。

これを見たセヴァスチアンは少しく傍によつた。彼れは今や自己の危地に在るを忘れ、たとへ共に命を殞すともルイを突き落さずに置くべきかと決心した。

彼れは機械體操でもする様に肘を掛けて橋の上へ上るや、猛然として豹の如くルイの兩腕を捕へた。

ルイの氣の付いた時には既に遅かつた。彼れは一聲恐怖の叫聲を残して遙か下へ落されて仕舞つた。

セヴァスチアンはルイを落した拍子によろ／＼よろけながら橋を飛ぶが如くに渡り氣力盡きてビアンカの脚下に伏し倒れて仕舞つた。

「御手柄／＼」とビアンカは覗き込みながら賞讃した。ビアンカの聲に顔を起したセヴァスチアンは女を凝視めて、

「私は人殺しをしました。貴方の爲めでなければこんな事は致しません。」

「正當防禦です。萬一嫌疑がかつても言ひ開きが立派に出来ます」

しかし。セヴァスチアンは伏して嗚咽するのであつた。

「私は人殺しをした／＼と彼女の兩手を燃合せた。ビアンカは慰め顔に手をセヴァスチアンの腕にかけた。けれども彼れは荒々しく振り切つて梯子を降り街へ飛び出した。

ほんとうに夢の様な話だ。一時間前には結婚式を挙げにやつて来た。しかるに今は人殺しの犯罪を犯して歸らねばならぬ。

彼は家路を辿る間、自分の生涯の多岐多端なるを想ふた。彼は苦しき戀の経験と、恐ろしき罪の報返を考へた。

「あゝ神よ、汝を信せしめ給へ！」と彼の良心が囁いた。下男共は用達に出掛けたのだらう家の中は森として静まり返つて、書齋には孤燈が悄然とゆらめいて居る。今頃は新婚旅行の途にある筈であつた。停車場には自分の荷物はビアンカのも

と共に待ち疲れて居るであらう何たる滑稽よ……。彼れは椅子にかけて、前後を考へて見た。欺偽に代ふるに殺人！ 罪何れを重しとなすか。

其の時忽然として室の隅に現はれたものがある。白い手だ。白い手は用箋を取り上げて何か書いて居る。彼れは齒の根も合はずガダ／＼顛へ

ながら手にとつて見た。

「汝の罪を免れんと欲するも能はざるべし」

セヴァスチアンは自分は今狂氣するのでないかと疑つた。そしてルイを殺したのもレオンテインの此の世を去つたのも自分の腦の描く幻影ではないかとも思つて見た。彼れは忌々しげに用箋を引裂いて、紙屑籠の中へ突き込んで書齋の方へ行つた。彼れが書齋の戸を開くや思はず恐怖の叫聲を發した。死んだと思つたお富さんならぬレオンテインが首を頂垂れた儘、椅子にかけて居つた。そしてセヴァスチアンの入り来る方へ顔を向けた。

「レオンテイン！」と、セヴァスチアンは突き進んで

「お前は死んだのだ！ お前は燈臺で落雷した時に死んだのだ！」

レオンテインは無言のまゝ首を振つた。

セヴァスチアンも一語を發する事が出来ないで妻の傍の椅子に腰を下した。

第九篇 地下水道

第一卷 燈臺の一夜

セヴァスチアン家の屋根裏の室でトランクを開いて中から手紙を取り出し読み取つて居るのはレオンテインである。

手紙はチヤリーから来たものだ。彼れはなつかしうな眼をして甘き戀を語りし去にし日の夢を繰り返した。其の時は決して今日の様な悲惨な運命に逢着するとは思はなかつたのであつた。

彼女は手紙に打ち俯して嬉しき又悲しき思ひ出を泣いた。さるにても亦彼女の念頭に浮ぶのはラヴェンガの事である。これまで幾度自分の危急を救つて呉れたか

知れない。そしてチヤリーを思ひ起す毎に更に此の恩人を必ず連想する。神秘的な連絡がそこにある様に思はれてならない。しかし彼女の眼がチヤリーの手紙に注ぐ時、ラヴェンガの事は消え失せた。彼女の心、彼女の靈、彼女の記憶を所有するものは矢張りチヤリーの外にはない。

チヤリーに對する心は戀で、ラヴェンガに對する心は敬である事は事實だ。想ひ出すだに恐ろしき彼夜の光景！ 彼女は恩人の愛を感謝すると共に眼前に浮ぶものは恐ろしかりし其の夜の光景であつた。

燈臺に落雷して建物が全部崩壊した時に無慘や看守夫婦は押し潰されて最後を遂げた。しからず同じ建物に居つたラヴェンガとレオンテインは怎うして助かつたか。それは一つの奇蹟と見る外はない。

二人が燈臺の下の室で語り合つて居る時にランプはジーツと音して消えた。石油が絶えたのだ。

ラヴェンガーは地下室の石油罐を取りに降りて行つた、何分暗中の事として、彼れが柵から石油罐を下すと次の罐も其の次の罐もかうくと落ちて来てラヴェンガーの兩腕の間に重なつた。彼れはお伽噺の兩腕に卵を一杯抱へた男の様に怎うする事も出来なかつた。

「レオンテインさん、早く来て手傳つて下さい」

レオンテインは何事が起つたかと急いで地下室へ下りて見た、ラヴェンガーが兩腕の間に石油罐を一杯抱へて笑つて居る。そこで罐を元の通りに柵へ上げて二人は階段を登りかけた。

其の刹那である。恐ろしい雷鳴と共に燈臺は崩れ煉瓦や石が此の階段に押し来て出口を塞いで仕舞つた。

暗の中に浪と風と電光と雷鳴とが暴れ廻つて石の雨、煉瓦の礫物凄く、昨日までは航海者の望と仰がれた燈臺の雄姿も廢墟の如く崩れて終つた。

凡そ十二時間こんな騒ぎが続いたらう。レオンテインは只恐ろしさにラヴェンガーに獅噛み付いて居つた。石の降る音が一先づ鎮むと、今度は天地寂寞として浪の音の外物音が聞えぬ。

追々腹が空いて来た。そこらは暗くて何が何やら薩張り判らぬラヴェンガーは出口を捜し廻つたけれ共それらしい所も見當らぬ。

二人は相擁して此の地中に死を待つより仕方はなかつたその時卵位の大きさの穴から日光が差し込んだ。

日光！ 生を與ふる日光！

ラヴェンガーは勇を鼓して其の穴を大きく仕始めた、外では浪が土砂を洗ひ去るので割合に早く人の出られる丈の穴が明いた。

「さあレオンテインさん、此の手につかまつて出てお出でなさい」
レオンテインは感激の餘り地に伏して神に熱い祈りを捧げた。自分は決して死な

ない。チャリー、カーゾンの名を清める、我畢生の事業の成就するまでは決して死なない、かくて二人は九死に一生を得て本土に歸つて來た。

死んだと思つて居つた、レオンテインの歸宅して居るのを見てセヴァスチアンの驚ろいたのも無理はない。

「レオンテイン、お前とラヴェンガーさんが助かつた事を何故知らしては呉れなかつた」と、セヴァスチアンは素知らぬ振りして問ふた。

「貴方はそれを知る必要はないと存じます。不幸にして貴方の卑怯な計略は失敗に終つたのですから、もう一度やり直す思案でもなさつたらよいでしやう」

「それは又どういふ意味だ」
 「こつちいふ意味です。妾は貴方達の計略は露ほども存じませんでした、そして氣球の爆破したのは貴方の仕業です」

第二卷 階段の上にチャリー

セヴァスチアンは言ひ捲る積りであつたのが、自分の計畫が暴露したので流石に吃驚した。

「お前がそんな目に遭ひたくなかつたら、何故先日私が離婚を云ひ出した時に承知しなかつたのか」

「それは貴君がチャリー、カーゾンを獄に投じ且牢死せしめた證書偽造の犯罪を白日になれば何時でも承知致すと申して居るではありませんか」

中々手硬い談判である。

セヴァスチアンは肩を聳かしすん／＼此の室を出て行つた。其の時何かカチンと音がした。

レオンテインも續いて戸を開けやうとしたけれども錠が下りて居つた。驚ろいて

窓の方へ行つて見たら鐵の扉が頑と閉ぢて居る。

監禁せられたのだ。

叫んでやらうか。此の家の下男下女は悉くアルゼンチン人で主人の腹心のもの許りである。よしや叫び聲を聞き付けたとて、助けに来て呉れる筈はない。

それに此の家の在る處は淋しい場所だ。誰れとて自分の叫聲を聞いて救ひ出されやうとも思はれない。

無念に失望にがつかりして椅子に腰かけたまゝ彼女は嘔り泣いた。

朦朧として室の隅に物が現はれた。

年久しく戀ひ慕つて居るチャリーの姿である。

椅子にかけて居つたチャリーの姿は立つて、悲しげにレオンティンを見て微笑した。

或ひは視覚錯誤であるかも知れない。しかしこんなにはつきりチャリーを見た事はない、少し老けて、嚴めしく見ゆるけれどもチャリーに違ひない。

懐かしさの餘り彼女は近付いた。すると其の姿は兩手を擴げて、

「近く寄つてはいけない。危い事はないけれども近付てはいけない。そして私の愛に信頼しなさい」

彼女が尙も近寄らんとした時に其の姿は掻き消す如くに失せた。

一聲叫び聲を發すると共に彼女は倒れた。

ピアンカは今し電話を聴いて居つた。話相手はセヴァスチアンである。大分始め

は面白そうな様子であつたが、今度困つた様な顔付きをした。

やがて話が終つたので、受話器を架けて、ベルを押して二人の乾兒を呼び付けた

彼女は電話番號を指しながら

「お前達二人は今晩此の宅へ行つて、そこに居る娘を自働車で連れてお出で。途中どんな事があつても娘に口をきいてはならん」

二人に命じて歸した後、彼れは腕かけて、思ひに耽けるのである。思ふ人はセヴァ

アスチアンか？

あらず、ラヴェンガーである。

とても逃れる途はないと、絶望の淵に沈んで居つたレオンティンは何時しか假睡
 むのであつた。やがて、錠を開ける音に目を覺まして見ると、三人の覆面した男が
 這入つて來た。そしてレオンティンを連れ出さうとした。

一寸躊躇したけれども、セヴァスチアンの手にあるよりは此の三人の手に渡つた
 方が却つて安全と思つたので、レオンティンは意を決して彼れ等の命に従つた。

一人の男が先に立ち、二人はレオンティンを中に挟んで階段を降りて、セヴァス
 チアンの室の前まで行くと、そこに彼れは満足らしい顔容をして立つて居つた。

レオンティンは、悠然として夫の面前を過ぎた。もう恐ろしくも何ともない。自
 分の傍にはいつもチャリリーが隨いて居ると確信して居るからである。

又もチャリリーの姿が階段の上に顯はれた。驚ろいたのはレオンティンのみでない
 セヴァスチアン及び三人の怪漢は此の異形の姿を見るや、仰天して仕舞つた。

中にもセヴァスチアンの顔には、掩ふべからざる恐怖の色が現はれた。彼れは道
 ならぬ戀の爲めに無垢の少女を迫害して居るのみならず、其の戀人を奈落の底に陥
 して仕舞つた。迷信強き彼れの常として、幽霊が復讐に來たものと恐れ戰いた。

チャリリー、カーゾンの姿は手を上げて彼れ等を制した。

覆面した男の一人は、ポケットの中のピストルを引金に指をかけ？ 其のまゝ服
 の中から怪しい姿に射た。

弾は命中したものと見えて、其の姿は階段を轉げ落ち手擦に打つ付かると見る間
 に消え失せた。

彼等は急いで降りて來て見たけれども、何もない。これは不思議だ。慥かに手堪
 えあつたのに死骸が見えぬとは怪しいと室々を捜し廻つたけれども何の變りもない

チャリーの假装をした人間か、又チャリー自身か、又幽霊か、何だか判らない。しかし、セヴァスチアンにとつては早くレオンティンを片付けて仕舞ふ方が急務だ。

彼れは怪漢等に命じてレオンティンを連れ出さしめた。これより數分前、一臺の警察自動車は二人の警官と一人の犯人を乗せてこゝへ差しかゝつて來た。

「おや！ あそこから人が走つて來るぞ。何か事が起つたらしい。僕は少し前に銃聲を聞いた」と一人の巡査はセヴァスチアン家の方を指した。

二人の巡査は犯人を自動車中に残し置いて、裏口の方へ進み寄つた。

今しもそこから出て來るのは、レオンティンを運び出す三人の怪漢である。

彼等は自動車に飛び乗るや警官の止れの命令を耳にも入れず、逃げ出した。

警官の自動車も續いて追跡した。

一人の警官は車上に立ち上つて、

「止まらぬと撃つぞ！」と叫んだ。

怪漢等の自動車から此の巡査の自動車を見掛けてピストルを撃つた。

弾は運轉手に命中し、把手を離したので自動車は當もなく疾走し出した。

警官も應戦したけれども、車の動搖が烈しいので、弾は皆外れた。

レオンティンは恐ろしさに振り返つた。運轉手を斃された警察自動車は今や斷崖

に向つて遮二無二進んで行く。巡査の一人は之を操縦しやうと仕たけれども時機は

既に遅かつた。

自動車の前輪が崖の縁に外れて、一搖れするや、谷底見掛けて落ち込んだ。

此の恐ろしい光景にレオンティンは身顛ひしない譯には行かなかつた。

數分の後、此の自動車はレオンティンを乗せてピアンカの宅へ到着した。

第三卷 此處で駄目なら

「そんな手荒な事をしてはいけない」とレオンティンを連れ込んだ覆面の男に向つてピアンカは制した。

レオンティンは椅子に倒れて身の周囲を見た。曾てセヴァスチアンの跡を尾けて来た事のある賭博室である。彼女はピアンカを見て更に恐怖した。何も此の女の身の上を知つて居る譯ではなかつたのだが、只「毒婦だ」といふ印象は深く頭に刻み付けられて居つたのだ。

一人の男は覆面を脱いでピアンカに報告した。

「今日は實に不思議な事を見ました。慥かに當人は撃ち落したのですが、死體もなければ行衛も判りませんでした。私の考へでは例のラヴェンガーといふ不思議な人間の仕業だと思ふのですが、それにしてもあの奴は何處に居るのだらう」

「此處に居りますよ。皆さん」強い聲で爐邊から返事した。今しも噂して居るラヴェンガーがその椅子にちやんと腰を掛けて居る。

一同の者は驚ろきといふよりも寧ろ呆氣にとられた。何時の間にか穴倉を脱げ出て見えなくなつたラヴェンガーが。忽然として此處に湧いて來た。彼れには靈妙不思議な力があるに相違ないと思つた。

ピアンカに報告をして居つた乾兒は叫聲を發して跳び退がつた。ラヴェンガーは冷靜に此の場の光景を傍觀して居つた。

二つの色がピアンカの顔に現はれた。一は恐怖の念で他はラヴェンガーに再會し得た喜悅の心である。

生れて三十年ピアンカの胸には斯の如き熱い戀の萌え出でた事はない。彼女の暗黒な性格もラヴェンガーを懐ふ時には純白な情緒に變るのであつた。

夜も晝も思つて居つたその戀人はいつしか見えなくなつて仕難つた。彼女は諦められぬ戀を諦らめて、今度はセヴァスチアンの財産に心を奪はれた。

所へラヴェンガーが亦もや眼前に顯はれたので彼女の戀の炎は再び此處に燃え上

つたのである。

下男を去らした彼女がラヴェンガーに近寄つて仇つばい目で見つめた。ラヴェンガーは之を冷やかな眼で見返した。

ビアンカは手をラヴェンガーの胸に置いて。

「よく返つて来て下さつたのね」

何とも云へぬ笑がラヴェンガーの顔に現はれた。

「貴女の嬉しく思ふのを嬉しく思ひます」

これは明らかに冷笑的の返事だ。ビアンカは馬鹿にされたので眞赤になつて、

「今度こそは逃すものか」怒の相物凄くベルを押して乾兒を呼んだ。

「此の人を鐵の藏に閉ぢ込めて仕舞へ！」

乾兒はラヴェンガーを捕へて武器を持つて居ぬか檢めたけれども、何もないので

一人づゝ兩腕を捉へて牢の方へ引つ張つて行つた。

後見送つたビアンカは口惜しさに唇を噛んだ。彼女はラヴェンガーを愛し且つ憎んだ。性格の峻烈なる婦人はよく自分の意に従ふものは無暗に愛し、意に逆ふものは蛇蝎の様に嫌ふものだ。

彼女は鏡の前に立つて自分の姿を映して見た。

雲の鬢、霞の眉、色は白く、髪は黒く、窈窕たる姿は自分ながら見惚れる程美しく、これで男が惚れぬなら男の方が無理だ。

なる程そうだかも知らない。けれども、只一つ彼女が見落した點がある、それは永年墮落の生活に浸みこんだ下品といふ事である。

自分はセヴァスチアンが惚れて居つた、レオンティンよりは美しくしいに違ひ無いあんな蒼白い顔をした女より此の蔷薇色した頬がどんなに男を引き付ける力があるか判らない。しかし彼女は自分よりも劣つて居ると思つて居るレオンティンがラヴェンガーの愛的である事は想像だも及ばなかつたのである。

ラヴェンガーを監致しやうとする藏と云ふのはピアンカの盗んだ品物が賣れるまで匿つて置く處で、壁を切り抜いて拵らへてあるので外面からそんな室がある事はとも感付けない。天井も四邊も皆銅鐵板で張つてあるから此の中へ入れて錠を卸して仕舞へばどんな者だつて脱け出られる道理がない、

「今度こそはしめたぞ！」と乾兒がラヴェンガーを連れて階段を昇つて行つたのを見送つたピアンカは云つた、何れ遠からず彼れは自分の意に従ふに違ひないと獨り領いた。ラヴェンガーを鋼鐵の藏へ入れた乾兒は綿密に錠を下しながら、

「これならば、よもや脱け出られぬい」

こゝで駄目なら入れて置く處がないと、他の奴が答へた。彼等は錠をしつかり下してやがてピアンカに復命すべく歸つて行つた。

此の家の階上に監致せられた、レオンティンは、絶望に悄然とうなだれて居つたけれども、セヴァスチアンの手に在るよりも却つて心安さを感じた。此の室は普通

の寢室であるけれども戸は何れも錠が下してあつて、街上から遙か高い窓も堅く鎖されて居つた。

返すくも卑怯なのはセヴァスチアンの振舞ひである彼れより犯罪の秘密の自白を得る時の外は此の眼再び彼れの上に注ぐまい、それにしても此の嚴密の扉を開く鍵はラヴェンガーの掌中に在る様に思はれてならぬ、彼れは自分がこんな處に閉ぢ込められて居るのを知つて居るに相違ない、必ず助けに来て呉れるだらうと考へながら思はずラヴェンガーの名を呼んだ。

「貴女の仰せのまま、レオンティン」と聞き慣れた彼れの聲がして、カーテンの蔭から今し想つて居つたラヴェンガー其の人が歩んで來た。

第四巻 不動の金縛り

ラヴェンガーはやさしく彼女の手を執つて

「手荒な事はしませんでしたか」

「いゝえ」

レオンテインは小聲で答へた。

「氣を落してはいけません。必ず善くなります。もう芝居もだんく終りに近づいて來ます。當分貴女を獨で置かなければならぬかも知れぬけれども決して恐れてはなりません。チヤリーの思ひは必ず貴女を護つて居ります」

これ程頼母しい言葉が又とあらうか、レオンテインの胸中からは恐怖が去つた。

それにラヴェンガーはチヤリーに對して少しも嫉妬心を持つて居ない。彼れは自分の戀を犠牲として自分に盡して呉れるのだ。

此の時、扉が開いて、ピアンカが入口に立つて居る。

兩人が話し合つて居るのを見るや、顔色を變へて

「こゝで何をなさつて居るのを見や、顔色を變へて」

「どうしてといふて、お宅は居心地がよいので遂こゝまで遊びに出て來たので……」

……と、馬鹿丁寧な辭儀をした。

「彼方へ連れて行け！」と命じたので背後に控へて居つた乾兒は、兩腕を捕へて例の鐵の藏へ階段を降つて行つた。ピアンカも烈火の如く怒つて之に續いた。

「どうして逃がしたのか」

「ちやんと錠を下して置いたのですが……」

「錠を下して置いたものがどうしてあの藏から出られるか、嘘を吐け……」

一人の乾兒は主婦に向つて

「奥さん、此の人にはどんな錠も役に立ちません」

ラヴェンガーは藏に入れられながら呑氣さうに壁に倚りかゝつて微笑した、こんな冷笑的態度にピアンカは狂氣の様に怒つた。

「お前達はどこまで馬鹿だか判りや知れない」と乾兒に入つ當りして「今度妾が錠

をかける」

重い扉をカチンと締めて、嚴重に鍵をかけた、瓦斯體にでもなつて鐵の分子からでも脱け出るならいざしらす、そうでない以上は此の中から出られる道理はない。いや瓦斯體と雖も脱出する事は出来ない。

乾兒を去らした後、彼女は深い思ひに耽つて廊下を彼方此方と歩んだ。

生れて以來こんな侮辱を受けた事はない。自分はラヴェンガの愛を求めてはねつけられた。今まで彼れの心がレオンティンに奪はれて居つたとは夢にも知らなんだ、處が目のあたり二人の睦じく話し合つて居るのを見せ付けられて堪つたものではない。

ラヴェンガーはレオンティンを愛して居るのだ自分の當の戀敵はレオンティンである、と思つて彼女は直に或る決心をした。

「上に居る女に何か變りはないか行つて御覽！ 今度はあの女を片付ける積りだか

ら仕事に済んだら地下水道からうつちやりなさい」と乾兒を呼んで命じた後自分も階段を昇つて様子を見に行つた。此の時には流石に妖婦の顔も將に起らんとする殘忍なる光景を想像して眞青であつた。

ビアンカの宅といふのは此の界限では随分舊いもので、市區改正以前から地下に大きな水路がふせてあつたが其の後永い間用ゐないので殆んど今は忘れられて居つた所が盗品貯藏所の改築中圖らず此の水路を發見して其の先を搜索して見ると半哩程先に大川に出口があつて同時に貯藏所から大きなパイプで市の水道に聯絡して居る事も判然した。

そこでビアンカは浴室と此の貯藏所のパイプを續け浴室のすぐ外部に仕掛扉を造つてこれから鐵梯子を降りて行くと水路の處へ出るいざとなれば自分の寢室から浴室の所へ来て梯子を下つて水路から逃げられる安全で確實な秘密路を設けた譯だ。

そこで浴室のスキツチを一つ捻ると水路に水が一ぱいになる、又一つ振ると今度

は水が大川へ吐く様な巧妙な仕掛けになつて居つた。

ビアンカは浴室の前の仕掛扉の傍に結果如何にと待つて居つた。毒婦と雖も人を殺すといふ事は餘り氣持のよいものではない。只敢てこれを決するもラヴェンガーを我者にしたいといふ一念からである。こんな身の毛立つ様な罪惡が行はるゝとは鐵の藏に閉ち籠められて居るラヴェンガーが知る由もないだらう。

彼女は想像して見た。……あの暗い水路からレオンティンの死骸が大川へ流れて行く、何處で殺したか解るものでないから露顯の心配はない。それで相手が亡くなればラヴェンガーがいくら頑固でも自分の意に従ふだらう。萬一従はぬとしてもセヴァスチアンと結婚して彼れの財産を自由にするに便利だ。

彼女は耳を澄して待つて居るけれども一向仕事が始まつた様子がない。遂に堪え切れずに居間に歸つて今度は殺される女の叫聲を聞くまいと耳を掩ふて座つた。

「女を下して来い」と一人の乾兒の聲「寢間でやつて仕舞ふのは奥さんがいやがる

だらう」

「誰が一體手を下すのか」

「お前が女を捕まへれば俺れがする。それで感付かれないやうにこゝから連れて来れば、俺れはカーテンの蔭に隠れて居る」

とう／＼一人の男はレオンティンの室の錠を開けて這入つたが、餘り好ましい仕事でもないので一寸躊躇した。

不思議にも其の時一本の腕がニュツと出て来て頭にからみ付き、一つの掌が鼻口を押へた。彼れは聲も出せねば、身動きも出来ぬ。

不動の金縛りとは此の事だ。やがて腰を抜かして、氣絶したまゝ倒れて仕舞つた倒れたのを見済ましてラヴェンガーは手を離したが間もなく其の男は息を吹き返して、ヒー／＼金切聲を出し始めた。

今は一刻も猶豫すべきではない、彼れはレオンティンの手を執つてキッスした後

「さあお出なさい。愚圖くして居る時ではありません、そして私の言ふ通りにする覺悟をして下さい」

第五卷 今度は唇まで

レオンテインは立所に堅く決心した、立ち上つてよろ／＼とよろめいたけれどもラヴェンガールの出した腕に絶つて轉ばなかつた。

彼等は既に正氣に戻らうとして居る男の傍を通つて急いで階段を下つて行つたけれども幸にも誰れも見咎める者もなかつた。

ピアンカの鋭敏な耳は直ちに足音を聴き付けた。けれども二人の乾兒が女を連れて降りて来たものと思つて別に怪しまなかつた。それに彼女は神経がいら立つて女の死骸を見るに堪えなかつた。

カーテンの蔭に身を潜めて居つた乾兒の奴も階段を降りて来る足音を聞いたけれ

どもこれも、仲間だと思つて居つた。

ラヴェンガールは往き來の間に水路の様子を周知したので、レオンテインを伴れて浴室の前の仕掛扉を急いで開けて、

「さあ、ここから降りてお出なさい。此の水路の先は大川へ出て居ります、底まで降りたら、水の引けるまで待つて出来る丈け早く先の方へ進んで行けば明るくなります。そうすれば無事に逃げられます」

「貴君は？」とレオンテインはラヴェンガールを氣遣つた。

「私は水を引かせて後、續いて行きますが、決して待つて居るには及びません」

レオンテインは手探りしながら梯子を降つて行つた。それを見てラヴェンガールは扉をしめ、浴室へ這入つて水を止めて、續いて逃げやうとした。丁度その時カーテンの蔭から男が出て来た。

彼れはラヴェンガールを見て開いた口が塞がらない、忽ちピストルを出して突き付

けた。

ラヴェンガーは少しも騒がず銃口の先に立つて笑つて居る。

二階に倒れて居つた男も正氣に返つて降りて来たが、ラヴェンガーを見て叫び出した、叫聲を聞き付けて此の場へ駆け付けたのはビアンカである。

彼女は自分の眼を疑つた。どうして出て来たらう。

ふと下を見た彼女は仕掛扉にレオンテインの着物の裾が切れて挟まつて居るを見て、此の場の魂膽が判つた。

彼女は浴室へ飛び込むや、スキッチを振つて出て来た。胸は波の如く立騒ぐけれども、笑を装ふて、

「お仕事をよい處で止めましたよ」とラヴェンガーに言つた。

下へ降りて行つたレオンテインは梯子の下で地下水路を隙洩る光線に透かして見た。水は恐ろしい勢で流れて居つたがやがて水門が開くと川へ落ちて行つて、一分

と経たぬうちに水路は空虚となつた。今は一二寸位の深さでちよろ／＼と流れる様になつた。

いくら水がなくても暗い管を潜つて行くのは氣味の悪い事だけれども、ラヴェンガーに約束した事を思つて、思ひ切つて地球の腸管とも云ふべき此の穴を進み出した。

或る時は頭が天井に着いた、けれども彼女は無我夢中で前へ／＼と走つた。

かくして進み進んで行く間に、漸くの事で遙か彼方がボンヤリ明るくなつた。彼女は愈々助かつたかと思つて一息する間もあらず、後ろの方でザーツと音がして、水勢鋭く水が押し寄せて来た。これは上でビアンカがスキッチを捻つた結果だ。

水嵩は急に増して来た。最早脛に達して濡れたスカートが足にからまる爲めに歩きにくくなつた。

躊躇して居る間に水はどん／＼増して今度は腰に達した。流れの急な爲めに左右

に押されてもう進めなくなつた。

もう二三十間の所で動けなくなつた。水は遠慮なく深くなる許りだ。胸に達し、肩を越し、とうとう顎を管め始めた。

もう一寸か二寸で溺れなければならぬ、此の危急な時に眼に止つたのはトンネルの崩壊を防ぐ支柱である。死物狂ひで其の木につかまつて首を高く擡げて息をして居つた。こうして居れば水は腰までしか届かない。けれども水は益々押し寄せて来て、再び肩を没し、顎に達し今度は唇までやつて来た。

愈々死が眼前に迫つて来た。

「チヤリー！ ラヴェンガー！ 總て過去の事が走馬燈の如くに腦に浮んで来た。かくして苦しまんより寧ろ一思ひに死を希ふた。死の神は今や數分の後に来て居る。

更に強い勢で水がドツと襲ふて来た、彼女は一も二もなく支柱からもぎとられ

て押し流された、息が塞がる様な、胸苦しい氣がして彼女はもがきつゝ流されて、眼を見開いた時には自分は川の泥深い岸に打ち上げられて居つたのである。

ビアンカの宅では又もラヴェンガーの姿は消えた!!

ビアンカが浴室でスキッチを捻つて出て来た時、二人の乾兒は自身の身の周囲を不思議さうに見廻して居るのを見た。

銃口の先に立つて微笑して居つた彼れが何時の間にもや見えなくなつて仕舞つたのだ。

ビアンカは靴を踏み鳴らして、

「何處へ行つたのか」と聲も荒々しく訊いた。

「何處かへ行つて仕舞いました」と一人の男がおづ／＼答へた。

「仕掛扉から下へ降りて行つたのだ。馬鹿者奴！ 早く降りて行つて連れて来い」と云つて更に他の男に向つて「お前は階段の上に立つて番をしておいで妾は室をみ

んな捜す」

彼女は室々のベッドの下、押入れの中、カーテンの蔭を隈なく捜し廻つたけれど居ない。

「又もや逃げられたのだ。」

第六巻 しつこひ戀

階段の上で番をして居つた男が突然叫び出したので、ビアンカは其の方へ急いで行つて見ると、彼れは浴室の方を指さして居る、彼女はラヴェンガの頭と肩がスキッチを捻る時に出たのを見て、飛鳥の如く飛び付いた。スキッチは此の時既に一捻りされて居つた。

ラヴェンガはビアンカの肩を掴んで廊下の方へ突き飛ばし、戸をドーンとした。此の時である、レオンティンが下で無事にトンネルから流し出されたのは、

ビアンカは戸を蹴放して出やうとしたけれども、ラヴェンガは更に押し出した。こうなつては色戀の沙汰でない。愛は變じて憎みとなつた。

「此の戸を開けなさい」と乾兒に命じた。丁度此の時仕掛扉から下へ捜しに降りた男が首を出して

「下には見當りません、水路は水で一ぱいです」

「馬鹿！」と雷が落ちた。

「ラヴェンガは浴室に居る其の戸を壊はして開けろ、さあ早く二人共！」

「二人の力は一人に優つた、ラヴェンガは遂に引き出されて仕舞つた。

「死んでも離してはならぬぞ」とビアンカは云ひ捨て、浴室に這入りスキッチを捻つた、がその時はレオンティンが河岸に打上げられた後で遅かつた。

引つ返して來たビアンカは、今度こそは此方のものだ。二度と細工の出來ない様な處へ押し込めてやらう」

「又鐵藏へ戻すのですか」と一人の乾兒

「殺つゝけて仕舞ひまじやうか」と他の乾兒が問ふた。

ビアンカはラヴェンガーの方を一寸見てうなづいたので乾兒はピストルを上げて狙を定めた。

ズドンと一發引金を引けばそれで済むのだが、乾兒はビアンカがよく氣變りする女で、殊にラヴェンガーに惚れて居るのを知つて居るから、確かに撃つと命令のあ

るまで躊躇した。

「どうして逃げ出さぬのですか」と嘲笑ふ様に云つて「貴方の思ふ所は意の儘に行

ける様ですが、もうそんな事も飽きたのですか？」

「奥さん」と平氣で呼びかけて「私は其の力で自宅へ戻つて來たのですのにピスト

ルの御馳走とはあまり情けないではありませんか」

ビアンカは思はず叫び出した。

「でも貴方はスキツチを捻つたではありませんか、何の爲めにそんな事をなされた

のです、又どうしてそれが知れたのです」

「奥さん。私は今話して居る以外随分色々な事を存じて居ります、私が何の爲めに

したかとお聞きですか……奥さんよや貴女は何の罪もない婦人を殺さうと謀つた事はありますまいな」とラヴェンガーは詰つた。

「此の野郎を絞め殺して仕舞ひまじやうか」と又も乾兒はビアンカの顔を窺つて、

此の野郎は上の室で私を絞殺さうとしました、奥さんこんな野郎を生かして置いて

は枕を高くして寝る事も出来ませんせ」

と云つて此の男も亦ピストルをラヴェンガーに狙ひ、ビアンカの合圖を待った。

ビアンカは益々ラヴェンガーを注視した。ラヴェンガーは不相變微笑して居る。

若し此の儘彼れが死ねば、其の死は勝利である、自分は永久に戀に破れた胸を抱いて居らねばならぬ。

「待て！」との命令で二人の乾兒はピストルを卸した。ビアンカは塑像の如く戀人の前に突つ立つたが、急に張つて居つた氣が弱つて、自分で自分の心を制する事が出来なかつた。

此の時ラヴェンガーは身を屈めてビアンカの手にキスした。

「私の様な弱い捕虜を殺すには貴女は餘り親切過ぎる」

實に皮肉な言ひ方だ。ビアンカは堪らず泣き伏した。

此の有様を見た乾兒達は意外な面容で互に顔を見合すのであつた。

「二人共彼方へお出で」と彼女は命じた。

一方レオンテインは氣が付いて後から命を救つて呉れた恩人ラヴェンガーが今來るか今來るか待つて居つたけれども出て來ない。その内に又も水がドーンと襲ふて來たのでとても、此の分では絶望かと思ふと悲しくなつた。

一刻千秋の思つて待つたけれども其の人は來なかつた。其のうちに又水が凄しい勢で出て來る、若し彼れがトンネルの中に居れば此の水に押し出されて來るかも知れぬと一縷の望を繼いで居つた。

ビアンカの宅で殺されさへしなげれば彼れは確かに生きて居る。と思ふと一刻もこうしては居られない。彼女は氣を取り直して、濡れた裳裾をかゝげつゝ、堤の上を川上の方へと走つて行くのであつた。

第十篇 隠れマント

第一卷 虎口を逃れて

土堤の上まで来たレオンティンは四邊を見廻した。此處は紐育の郊外で寂しい野の中に農家が散在して居る、幸に彼方に一軒の小さい旅舎があつて其の裏には小舎もあつた、其の旅舎の前に巡査が一人の男と何か話し合つて居る。

レオンティンは急いで巡査の方へ行つた、二人は急に話を止めて、驚ろきの目を見張つた。そうであらう、全身濡れ鼠どころか、泥鼠の様になつて、髪は振り亂れ着物は破れて居る、どこから見ても狂人としか見えぬのだ。

「助けて下さい」とレオンティンは喘ぎながら「妾はナヴァアル夫人と申します。妾

の夫はセヴァスチアン、ナヴァアルですが、妾を或る家に監禁して仕舞ひました。それは妾が居つては邪魔の事があるからです、それで其の家はグラント街の三十八番館ですが妾はその地下水道から逃れて來たんです。妾を救つて呉れた友人は悪漢共に捕まつて殺されて仕舞ふ處です」

巡査は相手の刑事にちらと眼で合圖した。

レオンティンは其の意味を解する筈はない。尙ほ語を續けて地下水道で惨い目に遭つた話を始めた。二人の警官は益々頻繁に眼で合圖を交はした。

「どうか妾の友人を助けて、其の悪漢共を一掃して下さい」と嘆願して、

「どうか急いで下さい。こういう間にもどんな目に遭つてるか判りやしない」

レオンティンが傍を向いて着物をかき合せて居る間に巡査は額を平手で打つてキ印かなあ」

「僕が番をして居やう」と刑事は云つて、更にレオンティンに向ひ慰め顔に

「奥さん、私はオーマラ刑事と云ふものですが、私故此處へ來合せて居つたのは僥倖です若し奥さんが警察署までいらして下されば今の悪漢の搜索は直ぐにいたします」

刑事は巡査に目くばせして、

「何すぐそこです」と云ひながら彼女を連れて歩み出した。

旅舎の前まで來ると刑事は立停つて

「一寸失禮致します、私は今外の事件が一つあるのですから、それを済まして、直ぐ返つて來ます」

レオンテインを外に待たして、彼れは電話でセヴァスチアンを呼び出した。

レオンテインが逃げ出した事を夢にも知らなかつたセヴァスチアンは此の報知を得て仰天したが、直ちに心を決し、

「どうか其の儘取押へて置いて下さい。實は妻は精神に異狀を呈して居るのですか

ら外に出さない様にして置きましたところ、今日の午後看護婦の隙を窺つて逃げ出したのです。只今すぐ私は看護婦と代診を連れて參りますからそれ迄どうか御願ひします」

「諾！」とオーマラ刑事は受話器をかけて今度は宿の主人に向ひ

「御主人。實は女のキ印を連れて來て居るんだが迎ひの者が來るまで御迷惑でも預つては呉れまいか」

「折角の御頼みですが丁度今こゝはふさがつて居りますから、旦那、若し御入用なら裏の自働車の道具など入れて置く小舎をお使ひ下さい」

オーマラ刑事はレオンテインの處へ戻つて來て、

「奥さん、此處に一寸待つて居つて下さいませんか。警察へ歸らんで此處からすぐ貴女の友人を救ひに參らうと思ふんですが」

彼れはレオンテインを其の小舎の中へ導き入れ自分も共に這入つて中から錠をか

けた。レオンティンは何うするのかと感つた。

「一體、妾共はどうするんですか」

刑事は慰め顔に、

「一寸の間、氣をお鎮めなさい、貴女は色々地下水道で難儀をなさつたので大分興奮して居らつしやる様ですから」

レオンティンは疑り始めて

「何の爲めに此處に居るのです」

「御心配はありません、お宅へ電話をかけて置きましたから直に迎ひに御出なさいましやう」

「此處に居るのはいやです」と入口の戸を開げやうとしたけれども、どつこい鍵がかゝつて居る。

「開けて下さい。開けなければ叫びますよ！」

此の時レオンティンの耳にセヴァスチアンの話聲が聞えた。虎口を逃れて獅子の窟に入れられたのだ。

話はピアンカの宅に戻る、

「二人共出でお出で！」とピアンカは繰返した。

何時もなら直ぐ命を奉じるのだが、此の時許りは二人顔を見合せのみで出て行かない。

「奥さん、あの女は逃げて行つたのですから必ず警察へ訴へたに違ひありません、すると面倒になるから此の野郎は殺つて仕舞ふに限ります」と先に首を締られ損なつた男は云つた。

「何故お前は殺つて仕舞ふと許り云ふのか」

「殺したとて何の支障へがあるものですか、あの野郎は先刻私を絞め殺さうとしま

した」

「それは本當です。こうなつては彼れが死ぬか私共が死ぬかといふ場合です」と他の乾兒は合槌を打つた。

成程さういふ理屈だとピアンカは合點した。

「お前達は永年妾に付いて居つて呉れたから間違つた事を云ふ氣遣ひはない。さあお前達がよいと思ふ事をしなさい」

と明らかに殺して仕舞へといふ命令だ。

乾兒等はピストルを擧げたが、ピアンカは急に其の前に立塞がつて。

「こゝでやつちやいけないあの室へ連れてお出で」

彼等は室へ連れて行つてラヴェンガーを撃たんと狙を定めた。

廊下に戦慄して居つたピアンカは突然室へ這入つて

「待つた。二分間時間を呉れておくれ、妾は彼れと話したい事があるから」

此の場になつて尙ほ未練があるとは笑止な話だ。

「おいジョー、どうしたもんだらう」

「まあ二分位なら待つてもやらうさ此の戸から逃げなければあの窓から飛んで行くより仕方がないから大丈夫だらう」とジョーは、佛頂面して云つた。

彼等は不平だらう出て行つた後、ピアンカは戸を閉めてラヴェンガーに向ひ。

「妾は貴君がこんな風に死ぬのを見るに忍びません。どうか一言色よい返事を聞かせて下さい。そうすれば妾は決して撃たせません、妾共二人で此處を落ちて行きますやう妾は妾の全財産を貴君に捧げます。そして生涯貴君を愛して忠實に仕へます

「随分結構なお話ですが私は招待を受けて居るので時間も、もう遅れましたからこれで失禮します」

と云ふかと思へば彼れは目の前でフーツと消えて仕舞つた。

第二卷 着せたものは何

ピアンカは喫驚して逃げ出しながら叫んだので乾兒は驅け付けた。シヨールはラヴェンガーが又も元の處に現はれたのを見てピストルを撃ち付けた。

忽然と姿は又もや消えて。弾は徒らに後の壁に中つた。

「仕舞つた！」とシヨールは階段を馳せ下つた。もう一人の男も之れに續いた。

ピアンカは此の室をよろめき去つて居間に歸るや椅子に打ち伏した。ラヴェンガーに對する戀は今や絶望となつた。

思へば口惜しい。何度出し抜かれたか知れない。彼れは到底自分よりは強者だ。

そうしてその鬱憤はやがて哀れなるレオンティンへ向つた。どうかして再び彼女を手に入れてさい。なんでやらなければならぬ。

こう考へて居る時に電話が鳴つた。受話器をとると、相手はセヴァスチアンだ。

「レオンティンは逃げ出したそうですわね」

「どうしてそれを知つて？」 妾はもう一度捕へたいと思つて居ますが」とピアンカは云ふた。

「そう今實は御承知の大崖旅館に取押へて、巡查を囁して歸して仕舞つたのですが貴女は看護婦となり乾兒を代診に仕立つて受取りにお出なさい、判つて？」

ピアンカは嬉しさに雀躍して、

「必ず受け取りに参ります。今度こそは貴君がよいといふまでは逃がしはしませんよ」

「ではぬからの様にしつかり頼みますぞ」

チリン／＼と電話は切れた。

「お世話様でした。私がお世話を承ります。どうか戸を開けて下さい」

かくオーマラ刑事に云ふのはセヴァスチアンである。

刑事は戸を開けたので、セヴァスチアンは戸口に立つた。レオンテインの驚きは
 どうであつたらう。可愛さうに彼女は奥の壁に倒れかゝつた。

「取押して頂いて誠にあり難う。實は今日午後看護婦が隙を窺つて逃げ出したので
 す。もう度々の事で困つたものです。何か變つた事でもありませんか」

レオンテインは口惜しさうに夫を睨み付けた。セヴァスチアンは眼を下向けて視
 線を避けた。

レオンテインは刑事に向つて、

「私を自由にして下さいますか。此の人は私の夫です。今日も私を殺さうとしたの
 で、これまでそんな事を幾度かしました。それは私が或る事を知つて居るので邪
 魔になつて仕方がないからです」

好人物のオーマラ刑事はキ印位に思つて別に氣にも留めなかつた。

「そつといふ事も度々あつた事は事實です、別に手荒な事はしません、女が精神に
 異常を來すと随分亭主に及向ふものです。そんな時はそれは取押へた事は事實です
 何とかして早く治してやりたいと思つて居りますが」と、うまく誤魔化した。

「私は決して狂人ではありません。若し此の儘にすれば必ず警察の御面倒になりま
 す」

セヴァスチアンは只微笑した。うまい策戦だ。巡査はうなづいた。

此の時セヴァスチアンは紙幣二十弗を掴ませた。巡査は唯々として鍵を渡して去
 つた。

残つたのは二人である。セヴァスチアンはレオンテインを見て微笑した。決して
 温和な微笑ではない。彼れは冠つて居つた猫をすつかり脱いだ。

此の人の心の底に潜んで居つたきかない根性が微笑となつて現はれたのだ。

兩人は互に睨みあつて居つたが、やがてレオンテインの眼に異様な光が現はれた

戸の處へラヴェンガーが何時の間にか来て此方へ歩んで居る。セヴァスチアンは驚愕を以て。レオンテインは喜悦を以て迎へた。

ラヴェンガーは這入つて来るやセヴァスチアンに皮肉に會釋してレオンテインの手をとつて外へ連れて行かうとした。

「貴様だけ出て行け！」セヴァスチアンはラヴェンガーに喰つてかゝつて、いきなり拳を固めて顎を撲つた、不意を喰つてラヴェンガーは昏倒した。

セヴァスチアンは逃げやうとするレオンテインを捕へて小舎に引き戻して押し込めた。

ラヴェンガーは此の時立ち上つて、セヴァスチアンに飛びかゝり、鍵を奪はんと争ふた。若し此處でレオンテインを逃がして仕舞ふては身の破滅だと思ふから、セヴァスチアンは死物狂で遣らじと闘つた。

ラヴェンガーの力が優つて居つたか、遂にセヴァスチアンの顔を腕で押へ付けて一方の手でポケットから鍵を奪ひ取つた。

鍵を奪つた彼はセヴァスチアンを投げ飛ばして置いて戸を開くやレオンテインを引き出したセヴァスチアンの立上つた時には彼等は既に彼方に走つて居つた。

處へ向ふからビアンカの一行が遣つて来て此の光景を見てすぐそれを悟り、乾兒に命じてラヴェンガーを捕へて小舎の中へ押し込め、續いてレオンテインも連れて來た。

セヴァスチアンは勝を誇つた顔をして、「サア、レオンテインを連れてお出でなさい」

ラヴェンガーは手を舉げて「待つた！レオンテインさん行く時に外から錠を卸して下さい」

セヴァスチアンはこれを聽いて哄笑した。が、ラヴェンガーが妙な手つきで何かレオンテインに着せて居るのを見て不審な顔をした。

何を着せたのか。合羽か何かを着せる様な手つきであつたけれども彼等の目には何も見えなかつた。

すると不思議にもレオンティンはバット消えて仕舞つた。

セヴァスチアンを始めビアンカ及び乾兒等は腰を抜かさん許りに驚ろいた。

第三卷 これぞ焦熱地獄

其の時入口の戸は自然に開いて又閉ぢ、鍵をかける音がカチンとした。目に見えぬレオンティンが出て行つたのだ。

乾兒等が戸口へ突き進んだ時には既に遅かつた。

ラヴェンガーはセヴァスチアン等の中へ這入つて、

「お互ひにこうして一しよに閉ぢ籠められました」といひながら、そこにあつた油のしみた紙にマッチを摺り付けて「若し皆さんが戸を開けやうとするなら此の火を

油樽の中へ入れますぞ！」

彼れは尙ほ其の邊の紙屑を拾ひ集めて、火の絶えない様にその次々と燃やして居つた。

ジョーといふ乾兒は隙を見て、ピストルを抜き出しラヴェンガーを狙撃した。彼れは立所によろめいて倒れた。

其の時手にして居つた火の着いた紙が油樽の中へ這入つたのでバツと燃え上つた火は既にして小舎一ぱいに擴がつて仕舞つた。

ラヴェンガーの云ふ事が瞭然判らなかつたけれども、これまで危い所をいつも救ふて呉れる彼れの言に従ふのが最善の途と信じて居るのでレオンティンは一も二もなく命せらるゝまゝに出で行つた。

其のマントといふのは外見普通のものであつたが、之れを着ると立所に姿は消え

て仕舞ふものであつた、それで彼女は轟く胸を押し鎮めて静々と戸を開けて出て行つた。

ラヴェンガーを置いて出て行くといふ事は彼女の到底忍び得る所でなかつた、けれどもさりとて命に背く譯には行かぬ。

ふと彼女は自分の袖に何か布片の様なものが下つて居るのを見た。よくよく檢視するとそれが絹よりも薄い絹のマントである事が判つた。

不審に堪え兼ねて彼女は裏表を返して見た、不思議なマントである。裏からはよく見えるけれども表からは薩張り見えぬ。

獨り此處を逃れ去るは到底彼女の堪え得る所でない。こんな隠見自在なマントが手に這入つた以上は、自分は此のマントを着て姿を隠しつゝラヴェンガーを保護して逃がさねばならぬ。

やがて小舎の中で聲が起つた、ラヴェンガーの高聲が止むと誰れか之れに答へて

それから暫らくいつそりしたと思つて居ると、銃聲が一發轟いた。

驚ろいたレオンティンは小舎の方へ走つて戸を開け様とした。隙間から烟がフツと吹き出して中は燃えて居るらしい。

旅舎の主人はスワ火事と居合す人々と共に駆け付けた。

小舎の中の混乱は名状すべからざるものであつた。ラヴェンガーが撃たれて斃れると同時に火事が起つたのでセヴァスチアン等は只自分の生命の安全を圖るために入り口へと焦煨つた。が戸は堅く鎖されて開かない。

やがて烟が一杯に擴がつてラヴェンガーの倒れて居る隅の方では炎さへも立上つて居る。

彼れは苦し紛れに窓の方へ行つた。鋼鐵の頑丈な扉が締つて居つてビクとも動かない、ピアンカは叫びセヴァスチアンは唸り、二人の乾兒は徒らに壁を蹴飛ばして居つた。

ジョーといふ乾兒はよろめき倒れて樽を轉ばした。驚ろくべし。其處に陥し穴があつて鐵の環の付いた蓋がしてあつた。

もう一人の乾兒は其の環を以て開けやうとした。けれどもしつかり錆び付いて居つて離れないので益々焦り出した。

こうなつては死物狂いである。隅の方から鐵挺を見付けて來たジョーは力を極めて環を離し蓋を上げた。

階段が下の暗い穴倉へ通つて居る、此の時小舎は既に火が隅から隅まで擴がつて居つた。

ラヴェンガーはと見れば燃え上つて居る二つの樽の間に倒れて人事不省に陥つて居る。幸にして炎は上へ上へとあがるので、衣は焦げて居るけれども未だ燃えるには至らない。

ビアンカは此の危急の場合にて戀を忘れなかつた。忽ちにして彼女の胸中には争

闘が起つた。片手には戀しいラヴェンガーがあり、片手には富んだセヴァスチアンがある。

両手に花とはうまく行かぬ、どうしても一方の花を棄て、仕舞はねばならぬ。

正に胸と頭の争闘である。遂に頭が勝つた。ビアンカはラヴェンガーを捨て、他の人々の後から穴倉の階段を登つて行くのであつた。

穴倉の外側には墻壁があつた。セヴァスチアン等はビアンカを顧みずしてそれを越えて行つた。中にジョーといふ乾兒は火氣に煽られて上から轉げ落ちた。

此の光景を見て居つたビアンカはしばし立停つた。彼女の胸中に此の時勃然として情火が燃えて來た。今度は胸が勝つた譯なんだ。踵を返した彼女は決然としてラ

ヴェンガーを救ひ出すために火焰漲る小舎へ取つて返した。

屋根は既に焔の猛威に征服せられて、頭の上から火の粉が降つて來る。壁は烟を吹いて、ラヴェンガーの姿さへも見えなかつた。

彼女は四ツ這ひになつて捜し廻つた、そしてラヴェンガの體に手が觸れると、遮二無二、穴倉の上の陥し穴の所まで引つ張つて來た。着物は所々燃えて居るので一生懸命揉み消した上漸く穴倉へ彼れを運んで來た。

人の性は矢張り善であつた。戀の洗禮を受けた。ビアンカは茲に處女の無垢に歸つて、ラヴェンガの傍に跪座して嗚咽して居つた。

呼べども叫べどもラヴェンガは答へなかつた。ビアンカは狂氣の如くになつて又もラヴェンガの重い體を抱へて喘ぎながら穴倉から上つて、ホツと一息吐くのであつた。

第四卷 絶好の隠れ場

不思議な隠れマントに身を包んでとある林の中で火事の物凄光景を見て居つたレオンティンはラヴェンガの身の上を氣遣ふの餘り小舎の方へ出掛けやうとした

が躓いて倒れるや氣も遠くなつて仕舞つた。

小舎は崩れて火焰は天に冲した。旅舎の主人や給仕やお客などが水よポンプよと右往左往に馳せ交つて居るのがレオンティンの眼には何だか遠い所の様に映つた。

全身の氣を集めて彼女は立上り又も小舎の方へよろめきながら走つた。途中まで來た彼れは牆壁からセヴァスチアンやビアンカが出て來たのを認めて急に停つた。背後からラヴェンガの出で來るのは必定と待ち構へて居ると、彼等は

傍を通りながら話し合つて行く、勿論レオンティンの姿はマントの爲めにさつぱり見えぬのだ。

「こつなつて仕舞へば、ラヴェンガは二度と吾々を惱ます事はない」とセヴァスチアンは云つた。

此の恐ろしい語を聞いたレオンティンは思はず一聲叫んだ、そして身の變装をも忘れ、マントを脱いで手に持つた儘、牆壁の方へかけ出した。

やつてなるものかとセヴァスチアンは矢庭に彼女を引つ掴まへた。丁度その時彼方からやつて来たのは、此の旅舎の主人である。

「どうか後生ですから妾を離して下さい。もう焼け死んで仕舞ひますラヴェンガーさんは……」彼女は身を忘れてラヴェンガーの身を心配した。

「此の女が火を放つたんです。ラヴェンガーさんはもう焼け死んで今更怎うする事も出来ないんです。今此の女を死せば又火の中へ飛び込んで仕舞ふまでです。」

此の言を眞に受けて旅舎の主人と給仕等はレオンティンを掴まへて離さない。セヴァスチアンは額の汗を拭いて

「自働車を呼んで宅へ連れて参りませう。何分酷い目に遭ひました。此の女は殺人狂です、貴方の小舎を焼いて何とも濟まない事をしました。兎に角自働車を呼んで下さい」

連れて行かれては大變とレオンティンは死力を盡して藻掻いたので、給仕等は手

を離した。レオンティンは其の虚に乗じて逃げ出し乍らマントを開いて身に纏ふた。

レオンティンの姿は忽然として消えた。

「何處へ行つたらう」

「何方へ逃げたらう」

人々は燃えて居る小舎の周囲を捜し廻つたけれども踪跡は更に判らなかつた。

人々が小舎の蔭の方へ捜しに廻つた後にレオンティンは静々と墻壁の方へ進んで行つてピアンカがラヴェンガーを運んで来るのに出遭ふた。

やがてピアンカはラヴェンガーを地に置いて泣き始めた。

レオンティンは密かにラヴェンガーに近付いて、懐かしさうに其の顔に見入つたけれども元よりピアンカの眼に見える道理はない。

此の時ラヴェンガーは幽かに目を見開いた。

「あゝ有難い。息を吹き返した」とレオンティンは感謝の叫聲を出すと思はずマン

トを取つた。

唐突に現はれたレオンティンを見てビアンカは仰天した。レオンティンは更に近寄つて

「貴女はラヴェンガーさんを助けて下さつた。妾の一番頼みにする人を助けて下さつた」と手を差し延べた。

其の手をビアンカは振り拂つた。自分の戀は遂げられないのだらうか。幾度も幾度も妾は失敗した。あゝとうとう自分の心は届かぬだらうか。

レオンティンは嬉しさの餘り知らず／＼マントをすつかり脱いで仕舞つた。ふと振り返るとセヴァスチアン等が追跡して來た。

ラヴェンガーが息を吹き返した以上は其の方は大丈夫である。と考へたのでレオンティンは彼方に見ゆる離れ家へと急ぐのであつた。

其所には澤山の大樽があつた。絶好の隠れ場所である。

第五卷 樽は崖から川へ

レオンティンは走り乍らもマントを着やうと焦つた。漸くの事で着て、これで安心と一生懸命で逃げたけれども追手は益々迫つて來る。

さてはマントの魔力も盡きたかと、心も心ならず右に左に方向を換へるけれどもセヴァスチアンも亦之を追ふて來た。

彼女はもう自分の運もこれまでと絶望の刹那、天なる哉。マントを裏返しに着た事が判つた。

失敗つたと思つて彼女は着直した。セヴァスチアンの吃驚して聲を擧げたのも無理はない、レオンティンは再び消えたのだ。

消えたレオンティンは何處へ行つたか。一番大ききうな樽の中へ隠れた。「どうしたんだらう」とセヴァスチアンは血眼で捜し廻つて居るけれども判る道理

がない。彼れはビアンカに助勢を乞ふた。

ラヴェンガの傍に坐つて居つたビアンカはラヴェンガとセヴァスチアンの顔を等分に見較べた、どつちの男を愛してやらうかと又も考へて居るのであらう。

それにしても先決問題はレオンテインといふ邪魔物を片付ける事だと考へたが、さて當の玉は何處へ隠れたか。

離れ家の傍に小さい林がある多分あの中へでも隠れたのであらうと思つたが、さてセヴァスチアンの下男共の居る前でそんな荒仕事も出来ぬので、

「レオンテインは多分あの方へ逃げて行つたのだらう」とあらぬ方を指して出し抜いた後、セヴァスチアンの側へ寄つて、

「此の林の中にも居らないとなると外に行く處はなし、きつと此の大樽の中に隠れたに違ひないから、早く殺つて頂戴な」

「殺つて頂戴な」とは蝮を食ふ雉子の聲だ。

セヴァスチアンは名案を考へて、

「故意と殺すには及ばん、私が今うまい方法で誤つて死んだ様に仕組から細工は流し上げを御覽じ」

どんな仕上げかと見て居ると、彼れは足音を盗んで隠れたと見當の付いた大樽に近寄つて突然蓋をして、上からどしどし釘を打つて仕舞つた。

とうとう生捕つて仕舞つたぞ、とビアンカを顧りみて笑つた。

これで其の仕上げが判つた、之れから坂へ轉げ落さうといふのだ坂は始めは緩い傾斜だが、下へ行くに従つて益々急に遂に二百尺の断崖から溪川を望んで居る。

彼れはやがて樽を横にしてちよいと押したが力足らずして止つた。もう一押し力をこめて押した。

樽はごろ／＼廻轉し始めた。死の墜落に向つて進むのだ。

「これで漸く片付いた」

とセヴァスチアンは一安心した。

樽は遠慮なく轉けて行つた、そして遂に毯の様になつて落ち込んだ。樽が川に落ち込んだ音を聞いて、此の二人の男女は莞爾と笑つた。

氣が付いて見るとラヴェンガーは急に肩の傷が痛み出して來た。人々は火事を消し止めやうと大騒ぎをやつて居るのに自分のみは安全の場所に横はつて居る、何が何やらちつとも思ひ出せない。

そう／＼小舎の中でピストルを撃たれた事は慥かに覺へがあるがさて其の後の事は更に判らん。

それにしてもレオンテインはどうしたか。彼れの頭にはレオンテインの外ないのだ。何處へ行つたらうと心配して見た。

其の時彼れの眼に入つたものはセヴァスチアンが今しも大樽を崖に落し込んだ怪

しい舉動である。

もしやと彼れは疑つて見ると居ても立つても心配で堪らない。

彼れがこんなな心配して居る時に眼の前に心配の本尊たるレオンテインが顯れた影でなからうか、幻でなからうかと疑つて見たが、矢張り本物だ。

讀者諸君も定めし怪しく思はるゝであらう。樽の中へ這入つて崖へ落された筈のレオンテインがどうして此處へ現はれたか。これは慥かに説明の必要がある。

彼女は最初大樽の處へ來て、一寸それを動かして這入つた様に見せかけ更にマントによく身を纏ふて逃げて仕舞つたのである。

これではセヴァスチアンが一杯喰はされたのも無理はない。

第六卷 これで一安心

樽の中へ這入つた振りをして逃げたレオンテインが離れ家の小蔭に潜んで様子を

見て居るとも知らぬセヴァスチアンはビアンカに媚を呈して茲に恐るべき罪惡を敢てした。

自分を殺す意志は明らかだ、もうあんな野獸の様な男に盡す義務がない野獸の様な取扱をしなければならぬ。

こう考へて彼女はラヴェンガの傍に來て、彼れを勞りマントを脱いでこれでお逃げなさいと云つた。

ラヴェンガは之れを辭退して、

「私は大丈夫ですから貴女はマントを着てお逃げなさい私は旅舎で休んで居ます。彼奴等は決して私を殺しはしません」

しかしレオンテインは中々諾かない。彼女は自分の身よりも恩人の身の上が案じられるので、マントを脱いで差し出した。

話は分れるが穴倉に残されたもう一人の男がある、それはビアンカの乾兒ジョー

で彼れが眼を開いた時に火煙が室一杯に漲ぎつて居つた。

彼れは焼け死んでは、堪まらんと墻壁を傳ふて外へ出て考へて見たが、何が何だか薩張り譯がわからん。只頭に残つて居るのは火事騒ぎ丈だ。

彼れは又ラヴェンガを撃つた事も思ひ出した。併しそんな事はどうでもよい、自分の助かつた事だけは事實だ。此の上は何だらうがかんだらうが逃げて仕舞へばそれまでだ。

彼れは單純の頭にこんな事を考へて逃げ始めた。火事騒ぎがまだ鎮まらんので氣付く人もないのを幸ひ彼れは忍びくんで崖の縁に生へて居る松の木の處まで行つてそれを力にして崖を飛び下りやうといふのだ。

逃げて仕舞へばこつちのものだビアンカを脅してうんと金を奪つてやらうと、こんな虫のよい事を考へて居る時に彼れの眼に留まつたものがある。

それはラヴェンガであつた。思ひをかけたラヴェンガが二三十歩隔つた所で

肘を枕にして自分を注視して居る。

こんな時に隠れマントでもあれば好都合だがと飛んでもない慾を起して見た。

彼れは急いで身を隠して見てゐると、レオンテインの姿がラヴエンガールの傍で見えたり隠れたりちらちらして居るのを認めしたが、やがて其の不思議なマントをラヴエンガーに差し出した。

ラヴエンガーはこれを拒んで、

「私は大丈夫ですから要りません、貴女はそのマントを着て、暗くなつたら又此處へお出でなさい、そうすればよい逃げる方法があります。それから決して二度と貴女の夫の處へ歸つてはいけません」

それならばとレオンテインはマントを着やうと擴げた其の瞬間ニユツと一本の腕が簾から出て、マントを奪ひ取つた。ジョーの仕業だ。

手の長い事に於て有名なジョーはマントを奪るや、韋駄天の様に崖の松の樹の方

へ走つて行つた。

失望して立つて居つたレオンテインの耳に人聲が入つた。それはビアンカ、セヴァスチアンと一人の乾兒とであつた。乾兒がレオンテインを見失つたと詫して居るのをビアンカは素知らぬ顔でフ、ンと聞き流して居つた。

レオンテインはラヴエンガーを抱き起して、

「さあ、逃げまじやう、愚圖して居ると見付けられますから」

「レオンテインさん、マントは？」

「失敗りました、ラヴエンガーさん」

二人は問答もそこへ簾の中に身を隠した、

神ならぬセヴァスチアンも當の敵が簾の中に隠れたとは知る由もない其の儘ホテルの方へ足を運んだ。

「あのラヴエンガーといふ奴は二度と再び娑婆へは出て來ない」と、セヴァスチア

ンは一安心といふ態だ。

ビアンカは今更の如くラヴェンガーが此の世を去つた事を考へて悵然として云つた。

「とう／＼参りましたね」

簾に隠れたレオンティンはラヴェンガーを勞りつゝ森の中の小路を辿つて逃げて行くのであつた。

第十一篇 ビアンカの死

第一卷 切石を振上げて……

一度簾の中へ逃げ込んだラヴェンガーとレオンティンは何時又追手が迫つて來るかも知らんので更に勇を鼓して小徑を辿り／＼奥の方へ逃げ始めた。

山は益々急に徑は愈々細くなつて來た。ラヴェンガーは負傷の疼痛に惱みつゝもレオンティンに助けられて林の中をさまよひ行くのであつた。

朝來の疲勞と饑餓とは幾度か此の山路に行き迷ふ男女を昏倒せしめんとした。

「あゝあそこに小舎があります」

林の中に小舎を見つけたレオンティンはこう叫んだ。沙漠を旅行する隊商がオア

シスを見付けた時の聲である。

やうく小舎の中へ辿り付いて一息した兩人は四邊を見廻した。荒れ果て、壁は落ち、椅子は碎けて居るけれどもつい此の頃まで獵番でも住んで居つたのだらう。多少の食糧なども残つて居つた。

二人は空虚の胃を満し、疲勞を癒して居つた。

かくして居る間も氣にかゝるのは追手の事である。どうしたら防げるかと思案して居ると、室の隅に一挺の銃が立てかけてあつて其の下には一個の双眼鏡もあつた。双眼鏡を手にしてレオンテインは四邊を偵察し始めた。

彼方の丘の頂上に蟻の様に見える二三人の人々が動いて居る、これぞセヴァスチアンとピアンカと一人の乾兒が山を越えてホテルに歸るのである。

ラヴェンガーは懸念に堪へぬものゝ如くレオンテインの傍によつて、

「私はどうしてもあのマントを取り返さなければなりませんからしばらく此處に居

て下さい。此の銃を離さなければ誰れが來たとて大丈夫です、兎に角あのマントがなくては二人共命はあぶないです」

かくいふてラヴェンガーは双眼鏡をレオンテインから借りて四邊を見た。疲れた彼れの眼にはセヴァスチアン等の姿は映らなかつた。

「大丈夫、僕は行きます。あのジョーの野郎は未だ遠くは行きますまい」

レオンテインはセヴァスチアン等がレンズに映つた事を此の際云ふに忍びなかつた。それは彼れの心痛を増す許りで決して効がないと思つたからである。

かくて銃に未だ二つの弾丸が装填してあるを慥かめてレオンテインに渡し、林を出てジョーの搜索に向つた。

ラヴェンガーの去るを見送つたレオンテインは番小舎に引つ返して來て思ひに沈むのであつた。チャリの名を清めんとする自分畢生の事業は水泡に歸するのであらうか。何故なれば自分はいかにも迫害を受けるのであらうか。

若し今日までラヴェンガーなかりせば自分は生きて居る事が出来たであらうか。

死せるチャリー……生けるラヴェンガー……

情緒亂れて糸の如くとは方にレオンテインの心である。

林を出たラヴェンガーは双眼鏡を眼にあて、四邊を見た。

其のレンズに映つた黒い物がある。慥かに人だ。しかも其の身振りから見ると何か考へて居る様子だ。

勿論遠いので誰れだか判る道理はない。しかしこんな山の中に居る人間は目指す

ジョーより外にないと彼れは心に決して籤を掻き分け、彼れの立つて居る背後の崖から忍び寄つた。

何も知らぬジョーはマントを不思議さうに裏表と返し、検べて居る。

もう一二間といふ所でラヴェンガーは一躍してジョーを捻ぢふせ喉輪を攻めたジ

ョーは倒れながら其の手を振り放して腕を風車の様に廻しながら肉迫して来た。

何方にした所がマントがなければうまく逃げ終はせる事が出来ぬ。云は、命がけの戦ひだ。

ジョーは其の腕力を頼んで猛虎の如く飛び付いて来る。

ラヴェンガーは右に左に其の銃鋒をあしらつてゐる内に、元より猪勇にはやるジ

ョーは追々疲れてだん／＼息づかひが荒くなつて来た。

此所ぞとラヴェンガーは拳をジョーの口中へ突つ込んだ。如何なる強漢もこれでは堪らん仰向きに倒れて頭を岩で割つて動かなくなつて仕舞つた。

ラヴェンガーはジョーの手からマントを取り返して峻しい崖を降り始めた。

全體此の邊は所謂「萬丈の山千仞の谷」で崖と崖と相對して削つた様な岩が深い谷を挟んで居る。

ラヴェンガーが危険を冒して此の崖を降り始めた譯は。つまり一時も早く隠れマントをレオンテインに渡したいからである。

向側の崖の頂上にはセヴァスチアンビアンカの一行が死んだと、思つて居つたラヴエンガーがジヨと格闘して居るのを見付けて驚ろいて居る間にラヴエンガーは岩の間を辿り、降つて行くのであつたが、彼れが受けた傷から血が再び迸り出て氣力は漸く衰へて來た。

運の悪い時には仕方のないもので、足場の儘かでない所へ岩の破片がザーツと滑り落ちて來た。何の事はない石の雪崩だ。

ラヴエンガーが氣力を失ふて倒れた時に震動を受けた岩が崩れ落ちて來たので、若し此の石の雪崩が足を擲つたらそれまでだ。千仞の谷に粉碎さるゝまでの話だ。

しかし運命の神は彼れを捨てなかつた。崩れ落ちて來た岩は危い所で停つた。彼れは一生懸命に木の枝につかまつて踏み堪へた。

大した傷こそ受けされ、此の時彼れは氣も力も盡き果てゝ居る。突嗟の考へで彼れはマントの見えない方を表にして之れを疊み岩の間隙に之れを藏ふやそのまゝそ

こに氣を喪ふて倒れた。

セヴァスチアンとビアンカの一隊はラヴエンガーとジヨの格闘した場所まで來て見たが姿が見えぬ、さては逃げて仕舞つたかと地團太踏んだけれども仕方がない其の内にビアンカの乾兒が叫び出した。

「野郎はあそこに倒れて居ます！」

成程、峻しい坂の中腹にラヴエンガーが死んだ様になつて横たはつて居る。

愈々鼠は囊の中のものとなつた。殺さうと生さうと意のまゝだ。嗚呼ラヴエンガーの運命も茲に盡きたのであらうか。

セヴァスチアンも此の時既に困憊の極に達して居つた。

小舎の出火で生命も既に危かつた。それからビアンカの意を迎へてレオンティンを樽の中に閉ぢ込めて谷底へ落した。彼れの神經はいやが上に興奮した極其の反對として非常に疲勞して來た。

もう囊中の鼠を退治する丈の餘力もなくなつたので彼れは後始末をビアンカと其の乾兒に托して歸路に就いた。

残つた妖婦ビアンカは乾兒を連れて坂を下りラヴェンガの倒れて居る傍らに立つた。

敵の傍にありとも知らぬ、ラヴェンガは昏昏として意識を失ふて居る。死か生か彼れの額は乾兒の振り上げた岩片の下に其の運命を待つて居る。

第二卷 吳越同舟

振り上げた切石の下に横はつて居るラヴェンガの運命は如何。

乾兒は満身の氣を腕にこめて打ち下さんとした、其の刹那、あゝ其の刹那！ 遮つたものがある。

それはビアンカであつた。いやビアンカの戀であつた。

「貴女は此の野郎を何で助けてやらうといふのか。一度ならず二度ならず邪魔を入れたが今度といふ今度は承知出来ねえ。」

何時もならば唯々諾々命を奉ずる乾兒も今日は一步も譲らない。彼れは又もや石を振り上げた。

こうなつては腕と腕の争で解決するより途はない。ビアンカは矢庭に飛び付いて石を搔奪らうとした。

しかし女は到底男の敵ではない、彼れは女を撞と投げ付けたので、機を喰つてビアンカは數間下の崖へこり落ちて仕舞つた。

こゝぞと乾兒は石を振り上げてラヴェンガの額を見掛けて打ち下さうとした。「待て！ 待て！ お前は隠れマントを手に入れたか」

と叫びつゝ此の場へ姿を現はしたのは、曩にラヴェンガと格闘して前額部にしたたか傷を受けたジョーである。

「何？ 隠れマント？ 一體何の事だい」
と振り上げた手を収めて乾兒は聞いた。

「いつも此の野郎が姿を隠す不思議なマントの事さ。それ火事の前に此の野郎が女に渡したのをお前も見た筈だ、それを此の野郎が何處かに隠して置くに違ひないのだ。その品を手に入れるまでは殺しちやならない」

崖の下からビアンカも語を添えた。

「その通りだ。大事なマントを手に入れるまでは決して殺しちやいかん。先づ身體を検べてそれで見當らなかつたら。此の邊に獵番小舎がある筈だからそこへ連れ込んだ上何とか手掛りを捜さう。それから片付けても遅くはない」

二人の男はブツ／＼云ひながらラヴェンガーを引つ擔いで、やがて小舎へ着いた。これより先、小舎に残つたレオンテインはラヴェンガーの消息如何にと外を見て居る間に、ビアンカと二人の乾兒の此方にやつて来るのを見た。元よりラヴェンガ

ーをも連れて来た事を知る由もないのでこれは適切り自分を捜しに來たセヴァスチアンの一行と思つて、急いで顔を引つ込めた。

が併し、狭い小舎の中にはうまい隠れ場所のある道理がない。彼女は臺所の裏口から逃げやうとしたけれど生憎錠が下してあつたのではたと當惑して仕舞つたが、ふとラヴェンガーの云ひ残した銃に氣が付いたのでそれを執つて、柵にかゝつて居るカーテンの蔭に身を潜めた。

表からとや／＼と這入つて来る足音がして、やがて擔いで來た物を下に置いたらしい。

「貴女は何處へ行くのですか」と一人の乾兒の聲がレオンテインの耳に這入つた。「臺所へ行つて何か氣付でも持つて來やう」とビアンカは答へて自分の方へやつて來る様子なのでレオンテインは氣が氣でない。銃を握る手は益々堅くなる許りであつた。

足音は益々近付いて来た。そして突然隠れて居るカーテンが跳ね除けられた。

ビアンカの顔とレオンテインの顔と期せずして相對した。

レオンテインは屹と銃を身構へた。出来るだけ生命を高く賣らうといふのだ。

何思つたか、ビアンカは手を舉げて静かにと制した。

「ラヴェンガーさんは今あの男等の爲めに大變危険な目に遭つて居るので助けて上げたいのですがとても妾の力では駄目ですから、どうか直ぐ助太刀を呼んで来て下さい。」

大事な場合ですから早く！ 早く！
と急ぎ立てた。

云は、敵同志の間柄である。それなのにどうして自分の味方となるのかと其の心根を解すに苦しんだ。がしかしそんな事を呑気に考へて居る場合でない、兎に角此處を逃れて助太刀を呼んで来るのが先決問題だ。

とこう思つてレオンテインはビアンカが銃を開けて呉れたので逃げ出した。

「早くして下さい」とジョーは待ち切れないで怒鳴つた「此の野郎の氣を付て、それからマントの在所が判つたら、片付けて仕舞はなければならん」

レオンテインの落ち延びたのを見定めたビアンカは棚から一本の瓶を取つて男の方へと歸つて来た。

「それは何です」と一人の乾兒は問ふた。

「アンモニアの興奮劑よ」と何氣なくビアンカは答へた。

「それじや仕事を早くして下さい」と云ひ残して男等はラヴェンガーの横はつて居る床を離れた。

眞實の處は乾兒はビアンカがラヴェンガーを生かして置き度いのを一も二も承知して居るので、結果如何にと遠くから監視して居る。

ビアンカの方ではラヴェンガーに瓶の薬を振りかけると、やがて氣が付いて、眼

をパチリと開いて彼れはビアンカを見た。

「もし！」とビアンカは唇に自分の指を當て、妻の云ふ事が判つて？ 若し判つたら一寸と點頭いて下さい」

ラヴェンガーは諾いた。そこでビアンカは聲を潜めて、

「妾が穴倉の戸を開けますから其の時捷く穴倉の中へ御這入りなさい。貴君の生命の助かる途はも外にありません。それで妾が戸を開けるまでは決して身動きしてはなりません」

此の語が通じたカラヴェンガーは再び點頭いた。

ビアンカは何か搜し物でもする様な振をして押し入れの方へ行つた。二人の荒くれ男を防ぐ武器として斧か何かないかと尋ねて居るのだ。忽ちにして彼女の眼に鐵砲が入つたがこれは彈丸を装填する時間を要するので斧より却つて不便だが今更仕方がない。それを傍に引き付けて置いて身を屈めながら、落ち付き拂つて穴倉の

戸を開けた。

死せるが如く横はつて居つたラヴェンガーは此の時彈機仕掛けの様に跳ね上つて穴倉の中へ飛び降りた。

電光石火の早業なので二人の男はピストルを撃つ事も出来なかつた。

第三卷 手を舉い

二人の男は續いて穴倉へ飛び降りやうとしたが、ビアンカが口元に立つて銃を握して居るので果さなかつた。

「手を舉げい！」とビアンカは命じた。こうなつては命のまゝだ。しかし女の淺智慧の悲しさ。相手のピストルを取上げもせず、自分も穴倉へ飛び降りた。

シヨ一の發した一丸は彼女の上衣を射通した。

穴倉の上と下とで茲に一場の戦闘が始まつた。上からはラヴェンガーを見掛けて

撃ち下すけれども中々命中しない。下からも負けずに應戦して居る。

かくする間に上の二人は一計を案出して板片の先へ帽子を冠せそれを穴倉の上で動かして下から見ると丁度人間の頭と見ゆる様にして敵を牽制した。かくとも氣付かぬ下の方では此の帽子を目掛けて亂射したので、それを手掛りに上から二發撃ち込んだ。彈丸は又もやラヴェンガーを傷けた。流石の彼れも挫と許りに床に倒れたのであつた。

此の物音を聞き付けた二人の男は穴倉に突入したが。此の機を逸せずピアンカの發射した散彈はシヨ一の脚に撃ち込んだので彼れは悲鳴を上げつゝ退却し仲間と續いて上つて來た。

彼等は一息しやうと思つて穴倉の戸を締めて外に出た。

「おゝ痛い。しかし野郎の方は慥かに撃ち止めたから。せめてもの腹癒せだ。今度は阿魔の方だ」

其の時彼れは思はず感嘆の聲を發した。それは柵の上に導火線の着いて居るダイナマイトを見付けたからだ。多分獵番が此の邊の木の株を爆破するに用ゆる積りで置いたものらしい。シヨ一は其のダイナマイトを手執つて、やがて導火線に點火すると穴倉の戸を一寸開けて下へ投げ込んだ儘一目散に逃げ出した。

導火線は燃え進んだそして、それが燃え盡きる時がやがて穴倉の二人の生命の盡きる時である。

之れより先、彈丸はラヴェンガーの前額部を射た。けれども幸ひに骨を外れたので致命傷ではなかつた。

ピアンカは袴の裾を切つて傷に繃帯し終ると穴倉の戸が、ガタンと閉ぢて四邊は眞闇になつた。

彼女が半死半生のラヴェンガーの傍に座したる時、彼れの胸中に浮び來るものは過去の生涯であつた。

彼女は自分の無邪氣なりし少女時代を想ふて見た。如何に楽しげな、華々しい空中の樓閣が心に描かれたか。

其の美しい樓閣を實在のものたらしめんとした。虚榮こそ實に彼女を淪落の生涯に陥れる第一歩のものなれ。

例へばそれは海上の蜃氣樓に達せんと舟を漕いで行く人の様なものであつた。いくら漕けども、美しく其の樓閣も亦遠くへ行く。そして自分はだん／＼海の深み／＼へと進み行くのを氣付かぬ様なものである。

かくして彼女は墮落の海の女王とはなつたが、ラヴェンガーなる人物に接するに及んで人生の眞意義を悟る様になつた。ラヴェンガーなくしては人生は彼女に何等の興味をも與へぬ様になつた。

彼女の生命は即ちラヴェンガー其の物であつた。しかも其の生命なるラヴェンガーの愛を獲んとして幾度か拒まれた。彼女が此の世を味氣なく感ずるのも無理の事

ではない。

暗黒なりし過去の生涯を考ふる時彼女は無限に悔恨の情に打たるゝのであつた。

只今レオンティンを解放して助太刀を喚びにやつた事がせめて彼女の罪の萬分の一を償ふべき善果であつたのだ。

こうして此の薄暗い穴の中で戀人の傍に座する時彼女は曾て感じた事のない温い幸福に酔ふ事が出来た。

さるにても、レオンティンはどうしたらう果して助太刀を連れて来るだらうか。自分は何れにしても死に到るまでラヴェンガーの身を護つてやらねばならぬ。

彼女は耳を澄まして見た。何の物音もせぬ。只二人の男が小声で何か相談して居る事だけは判つた。

一體乾兒共は何をしやうといふのか。

とこんな事をピアンカが考へて居る時二人の男は上でダイナマイトの用意をして

居つた時である。

ビアンカはラヴェンガの胸に耳を當て、見た心臓の鼓動は刻一刻と弱る許りである。彼女は徒らに氣を揉むより外はなかつた。

其の時、穴倉の戸が一寸開いて、光が射し込んだ。

ビアンカは直ちに銃口を穴倉の口の方へ向けたけれども、戸は再び閉ぢた。

何かしらんが穴倉の中へ落ちて来た。ビアンカはそれを手に取つて見て蒼白になつた。

ダイナマイトだ………

何時破裂するか判らん。ビアンカは自分の生命の安危を顧みるよりはラヴェンガの身の上を氣遣つた。そして、片手にそれを振り、片手で穴倉の戸を押し上げて上へ出た。

明るい所でよく見ると矢張りダイナマイトだ。

しかも、導火線は既に燃え盡きんとして居るではないか。

彼女は火を揉み消さうとしたけれども手を焼く許りだつた。今度は導火線を抜き取らうとした。しかし確り結んであつてそれも駄目であつた。

爆發は目前に迫つて来た。何處からか樂しげな鳥の囀り聲が聞えて来る。

今数秒の後此の人里離れた小舎の中で自分はラヴェンガと共に其の多情多恨な生涯の幕を閉ぢなければならぬのか。

最後の運命を一擧に決すべくビアンカはダイナマイトを其處に投げ出した。

其の瞬間耳も聳する許りの一大爆音と共に小舎は跳ね飛ばされ残るは木材の破片の堆きのみであつた。

木蔭から此の惨状を目撃して居つた二人の乾兒は、今更自分等のした事の恐ろしく且無益の殺生を悔いても及ばず此の上は此の場を逃ぐるに如かずと町の方へ出掛けやうとした。

一臺の自働車の木の間に縫ふて此方へまつしぐらに馳せて來るのが見えた。一人の女が此方を指しながら立つて居る。それは助太刀を呼んで來た。レオンテインであつた。

二人の男は藪の中と云はず沼地と云はず一目散に逃げ出した。自働車の人達も氣付いたらしい。聲を厲ましつゝ追跡して來た。

第四卷 三分間!!

樹の間を縫ひつゝ二人の乾兒は逃げて行つたが幾何もなく林は盡きて、廣洞な巖石磊々たる場所に來た。

追手の人達は聲を限りに叫びつゝだん／＼肉迫して來るのであつた。

岩山の間を通じて居る道路を逃げて行く二人の男の行手にトンチルが見えて來た。何か工事中らしい様子だけれども人影としては見えなかつた。

二人は眼と眼で合圖を交はしながらトンチルの口の方へ馳せて來た。

曩に小舎を脱け出したレオンテインはどうしたか。彼女は判然とピアンカの心が判らんけれども兎に角ラヴエンガリの生命を救ふには差當り助太刀を喚んで來なければならぬので、弱る心に鞭うちつゝも手負の鹿の様に倒れては起き、起きては倒れつゝものゝ十町も來たと思ふ頃嬉しや自働車の音が耳に入つた。

果して一臺の自働車が此方を指して馳せて來た。乗つて居る人の様子を見ると此の山へ運動にでも出掛けて來たものらしい。

レオンテインは何もかも打忘れ、

「助けて下さい! 此の先の小舎で今人殺しが始まる所です」と嘆願した。

「何? 人殺し?」と、一行の長とも見ゆる人は眉を擡めた。

道理である、此の山中で妙齡な婦人が髪を振り亂し、泥だらけの衣類を纏ふて突然人殺しがあるから助けて呉れといふた所でおいそれと信せられるものでない。多

分狂人だらう位の處であしらつて居るのも無理ではないのだ。

「それぢや兎に角駐在署長の處まで連れて行つて上げやう」

併し今一刻千金の場合にそんな廻り遠い事をして居られる譯のものでない。

「どうかさう仰有らずに、すぐ小舎へ行つて助けてやつて下さい」

狂人と見當付けて居るので何といふてもそれを聞き届けない。とう／＼署長の所へ同道する事となつた。

矢の様に走り行く自働車中に在つてもレオンティンは牛に乗つて居る様な焦燥さを感じたらう。

署長の門前に自働車が停るか停らぬ内にレオンティンは飛び降りて、署長に小舎の中で將に起らんとする慘劇を話して助力を乞ふた。

署長とても其の話を全部信じた譯でないけれども、役目として取調べの譯にも行かぬので出掛ける事になつた。

紳士の一行と署長とレオンティンとを乗せた自働車は爆音高く山の獵番小屋を目掛けて疾走し始めた。

やがて小舎が見えて来た。此の間凡そ數分間に過ぎなかつたらう。しかしレオンティンにとつては千秋の思ひである。

小舎の戸口で一人の女が非常に狼狽した態度をして居る。ビアンカがダイナマイトを持って餘して居る所なのだ。

ビアンカの姿を発見したレオンティンは一道の光明に接した心地がした。彼女が生きて居る以上はラヴェンガーも亦安全であらねばならぬ。

だが此の光明も雲の斷間からちらと射た光明であつた。小舎が濛々たる黒煙に包まるゝとやがて山岳も揺ぐ様な爆音が聞えた。

煙が散つた跡を見れば今迄在つた小舎は何處へ吹き飛ばされたのだらう。只其處此處から木材の燃ゆる炎が立登つて居る許りだ。

あの黒煙と共にラヴェンガーとビアンカの靈は天に昇つたのだと思ふとレオンテインは無限の感慨に涙の滲み出るを禁じ得ない。

あらゆる罪惡を犯して來たビアンカの暗黒な生涯も只其の最後に於て僅かに光明の一頁を残す事が出來た。ラヴェンガーを助けんとして却つて其の身も斃るゝに至つた。眞の戀は決して人を墮落せしめるものではない。彼女は戀に依つて少しでも人らしい行ひをなし得た譯だ。

レオンテインは燒跡に立つて涕泣した。チャリ去つてより以來此の世に頼みとする唯一人のラヴェンガーは慥かにビアンカと運命を共にしたに違ひない。ラヴェンガーに對する愛は矢張り戀であつたと。今にして想ひ返せば悲愁の更に切なるものがあつた。

署長を始め紳士等の一行の驚愕は實に言語に絶した。目さす小舎は突然爆發して仕舞つた。さるにてもこれは爆發の前に戸口に狼狽し

て居た女の仕事であらうか、毒を盛るとか瞞し討ちをするとかなら女のやりさうな事だけれどもダイナマイトを使ふなといふ事は到底出來るものでない。

署長もこう考へたので、

「犯人はまだ遠くへは逃げまいから、搜索して見やう」

と云ふてレオンテインのみを残して一同と共に自働車に打ち乗つた。

「餘り速力を出さないで」と運轉手に命じ更に紳士等に向つて、

「どうかよく林の中を氣を注いで居て下さい」

自働車は徐々に進行して行つたが幾何もなく署長は運轉手の肩をたゞいて彼方を指した。一叢の長い草が踏み躪られて居る。

自働車の上の一人は叫び出した。

「彼處へ二人の男が逃げて行きます」

成程林の中を二人の男が一生懸命に馳けて居る。

「さあ、追かけて捕へてやらう」
 と自働車を降りた署長は一挺のピストルを自身提げ他の一挺を一行の一人に渡し二人の跡を追ふた。

運轉手一人を残して他の人々も之れに續いた。

話は前に戻るが、トンネルの方へ一目散に逃げて行つた二人の悪漢は前途に恐るべき運命が待ち伏せして居るとも知らぬのである。

一體此の邊は道路普請の最中なので今一隊の工夫は此のトンネルの一部を開鑿すべく、ダイナマイトを装置し、監督と爆發係の工夫のみを残して去つた處であつた。「それでは三分間で爆發する様に導火線を切つて火を點けて呉れ。僕は此の先の道で通行を止めるから」

と打合して監督は林の出口の方まで歩いて行つて監視して居ると、一臺の自働車が林の中の道路を静々とやつて來た。これが署長一行が乗り捨てた車なのだ。

「おーい、そこで停れ！」と手を舉げて合圖したけれども一向通じない。

更に聲を張り上げて「今爆發する所だから、そこで停つて呉れ」未だ停らない。

今度は一聲「ダイナマイトだぞ！」と怒鳴つた。

ダイナマイトの一語に運轉手はギョツとしてブレーキをしめた、もうダイナマイトでは凝り／＼して居るからだ。

運轉手に教へられて林の中を見た監督は署長の一行が無我夢中になつて悪漢を追ふて來るのを見て、どうしたら止める事が出来るかと思案した。

署長はそんな事とは知らず、一生懸命である。

「さあ！もうぢきだ。慥かに捕まへて見せる！」

署長を先導として一行はバラ／＼とトンネルの方へ近づいて行くのである。此の有様を見て居る監督は氣が氣でない。

悪漢の一人はピストルを向けて追手を撃つた。署長も之れに應對した。

追手は益々接近して来た。

貴重な三分間！ もうそれも半分経過した。一行がトンネルに這入ると同時に導火線が燃えきつたらどうか。

爆発係の工夫は少し耳が遠いので叫聲が幽かに聴えるけれどもそれがどれ程自分の職務と關聯して居るか痛切に感せぬらしい。よし感じた所で命掛けてそれを止める程の酔興の男でもないのだ。

第五卷 ダイナマイト!!

トンネルの入口を距る五十歩といふ處で監督は署長に追ひ付いた。

「ダイナマイトだ！ 危険い！〜」

「ダイナマイトの爆発は見て来た。そこ退け！」

署長は先刻小舎を爆破したダイナマイトの事だと思つて押し除けて、尙も驅け出した。

した。

「馬鹿！、トンネルの中で今破裂する處だ」

と監督が破鐘の様な聲で怒鳴つたので始めて意味が通じた。

署長は急に立停ると共に背後から續いて来る一行を制し、命を限りに引返して逃げ出した。

此の時に爆発は目睫に迫つて居つたのである。

トンネルの中へ逃げ込んだ二人の悪漢は到底免れぬ運命と諦め、此の上は一人でも多く相手を殺してから捕まらうと、暗闇の中に伏して追手の来る方にピストルを擬して居つた。

しかし不思議な事には、叫聲も足音も一向聞えぬので一寸てれ氣味になつて来たシヨは乾いた唇を舌で浸して。

「おい、追手の野郎共は來ないぜ。此の分じや大丈夫逃げ終はすかも知れない」と

やゝ希望を回復した。

こう話して居る處から一二間の所にダイナマイトを破裂させる電池に接続した電線がある。それとも知らぬ他の男は、

「此處を抜け出れば慥かにうまく逃げられるせ、そうしたら……」と言はせも果てず百雷の落ちる様な爆音と共に巖石は崩れ落ちた。

ビアンカに別れて先に家に歸つたセヴァスチアンは又もレオンティンが危地を逃れて姿を隠した不思議さに、流石恐怖を覚えるのであつた。彼女には神の手が護つて居るに違ひない。さうだあのラヴェンガーなる人物が神の手となつて護つて居るのではなからうか。自分は非望の戀を得んとしてチャリ、カーソンを罪なきに終身懲役に陥れた。これはチャリーの靈が自分に復讐を企て居るのかも知れない。これはこうしては居られない。何處かへ高飛びをしなければならぬと銀行から數千弗の金を引き出して、只管將來の方針を思案して居つた。

處が戸棚に窺つて居る鏡に例の怪しい二つの眼が映つた。怪しの眼は背後の窓越しに自分の方を睨み付けて居る。

彼れはテーブルの上から重い水入れを密と執つて、いきなり怪しの眼を目掛けて投げつけた。

窓硝子は微塵に碎けて眼は消え去つた。

此の物音に駈け付けて來たのは料理番である。

「旦那一體どうなさいましたんです」

「つい手を滑らして硝子を破つて仕舞つたんで……」

と苦しい言譯をした。こんな怪しい舉動をする時には主人の傍に居ないに限ると思つて居る料理番は其の儘室を出て行つた。

セヴァスチアンも思ひに惱みつゝ室を去つて家の背後の庭に出た。植込の中から

見慣れぬ一人の若い男が現はれて来た。

「何用ですか」とセヴァスチアンは訝かつた。

其の男は一寸前へ進んで、

「内々奥さんの事に就いてお話ししたい事がありました！」

「奥さん」といふ語を聞いてセヴァスチアンはぎつくりした。

其の男はポケットの中のピストルを上から押へて、此處にあるぞと云はぬ許りに示威行爲を採つた。

「私は警官の来るまで兎に角貴君を預つて置きます」

「ぢや貴君は警察からぢやないんですね」

「え、私はラヴェンガーさんの爲めに働いて居るものです」

「解りました」とセヴァスチアンは柔順に答へて「私は上衣を取りに行つて宜う御座んすか」と尋ねた。

それではといふので二人は二階の寢室へ一しよに上つて行つたセヴァスチアンは押入れから上衣を取り出して着換へる拍子に躓いて轉んだ。

其の男が起してやらうとする刹那、セヴァスチアンは猛然と立上つて、其の男を撲り倒した。

此の男は實は刑事であつたのだ。彼れは直ちに起ち上つて二人は茲に組みつ解れつ格闘を始めた。

どういふ隙があつたかセヴァスチアンは刑事のポケットからピストルを抜き取つた相手突き離すと、其の儘廊下に逃げ出し室の戸に錠を下した。

かくして彼れは窓から露臺へ飛び出したが、困つた事にはそこで行き止つて仕舞つた。

背後の方の戸を壊して刑事の姿が顯はれた。

セヴァスチアンは窓の外から狙ひを定めて一發放した。

弾は誤またず刑事の心臓を貫いて、彼れは斃れて仕舞つた。

第六卷 嬉しき再會

庭の大きな木が窓際に生へて居つたけれども飛び付くには少し遠過ぎる。何處から逃げやうかと思案して居る最中に背後の方から料理番の足音が聞えて來たので。今は決死の勇を揮つて其の庭の木目掛けて飛び付いた。

幸ひに葉の茂つた枝に飛び降りたので大した負傷もせず其のまゝ木を滑り落ちて衣類を拂ひながら書齋へ歸つて來た。

彼れが何氣ない態で椅子に腰掛けて居ると料理番と他の一人の下男が慌たしく這入つて來て、

「二階に人殺しがありました」と息をはづませた。

セヴァスチアンはさも驚ろいた風に立上つて、

「何？人殺し？」

「そうです。盜賊が二人這入つて格闘した音がしましたが一人の方が撃たれたんで……」

「早く醫者を呼んで來い！」

「もう死んで仕舞つたんです警察の方へ電話をかけまじやうか」

「まあ待て、私が行つて見やう」

小舎が爆發した時に其の穴倉の中に倒れて居つたラヴエンガーはどうしたか。彼れは此の爆發が却つて幸ひとなつて氣絶から覺めた。

爆發のために大きな梁木が落ちて來て彼れの身體の上に乗つたけれども大した怪我はなかつた。續いて落ちて來た棟木は先に落ちた梁木を跳ね除けた。

此の騒ぎにすつかり氣が付いた。丁度眠が覺めた人の様に氣分も薩張りとして來

た。幸ひに額の傷の出血も止んで大した痛みを感じない。
 彼れが氣が付いて第一番に頭に浮んだものは、岩の間に隠したマントの事である
 彼れは穴倉の隙から漸くの事で這ひ出して外へ出た、四邊を見るけれども誰も見
 て居る人もない。

此の時二人の悪漢は爆發の結果如何にと窺つて居つたけれど藪の蔭になつてラヴ
 エンガーの出て來たのを氣付かなかつた。

彼れはよろめきつゝ松林の中を歩いて行つた。すると自働車の音が聞えたので、
 今此處で人に見付かつては大變と其の儘身を隠して、例のマントの置いてある場所
 へ行つた。

彼れは見覚えのある岩の間に手を入れて見た。慥かに藏つて置いた筈のマントが
 ない。
 はて不思議な事と其の邊の岩の間に手を入れて搜して見たけれども中々見當らな

い。彼れは益々其の邊の岩の間を探つて居る間に手に觸れた絹の様なものがある。
 切つてはならぬとそろ／＼引き出して裏を返して見た。

果してマントであつた、彼れは置場所を考へ違ひして居つたのだ。
 又も表を返せばマントは見えなくなつた。

ラヴエンガーはこれで安心といふ顔で、夫れを身に纏ふて小舎の方へ引つ返した
 さるにても彼れの胸を満すものはレオンテインの運命である。あの恐ろしい爆發の
 時にレオンテインは小舎の中に居つたらうか。

彼れは氣が追々鎮まると共に空腹を感じて來た。そして小舎の方へ足を早めて行
 く途中に一臺の自働車に運轉手のみ乗つて居るのに出遇つた。

彼れは大膽にそれに近付いて行つたがマントのお蔭で運轉手は更に見ぬらしい。
 幾人かの手に轉々と渡つたけれどもマントは少しも破損しない事を確めて安心した
 彼れは小舎の燒跡へ行つて、

「レオンティンさん！」と呼んで見た。
よし姿は見えぬにしても聲を聞き付けたら何處からか返事があるだらうと思つたからである。

レオンティンは焼跡の入口に立つて両手を顔に當て、泣いて居つた、涙は潜々として指の間から洩れて來るのであつた。

嬉しさに胸が一杯になつてラヴェンガーは暫時物も言へなかつた。

レオンティンは此の時人の近付いて來る音を氣付いたらしく手を顔からとつて四邊を見廻した。

ラヴェンガーはマントから顔と肩を現はした。レオンティンは喜びの聲を掲げて両手をラヴェンガーに差出した。

第十二篇 魔力の泉源

第一卷 背水の陣

セヴァスチアンの心には恐怖が宿つた。ラヴェンガーなる怪人物の行動が自分の曾て破滅に陥れたチャリカーゾンの復讐の手であるに違ひないと考へた。

逃走！逃走！此の上は只逃走あるのみだ。

遠い所へ高飛してそこで新しい生涯を始めねばならぬ。此の市に有する自分の所有物を打捨て、體一つで立去るのは何だか惜しい氣がする。しかしアルゼンチンの本國にある宏大なる農園其の他の財産に比すれば九牛の一毛にしか過ぎぬ話だ。未だ警官の來るにはいくらかの時間がある。と考へながら二つの手提鞆に銀行か

ら引き出した數千弗の金や、手廻りの品物を詰めて書齋へ降りて行つた。

呪ふべきは始めてレオンティンに會つた日であつた。自分が彼女に會はなかつたらこんな破目に陥らなかつたらう。彼女を獲んと野心から色々な罪惡を犯した。そして今度は彼女を捨てる爲めにも罪の上塗りをやつた。

彼れは葉巻煙草に火を點けてしばし思案に呉れた。

逃げるが果して是か、自分は充分の財力があるから若し必要とあれば賄賂で罪を免れる事が出来るかも知れぬ。

彼れは尙決心の動搖を感じた。あの美しいピアンカの事を考へると此の儘此處を去るにも忍びない。

あゝ矢張り止まらうか？

彼れが室の彼方を見ると、其處にこれまで屢々自分を苦しめた例の怪しい眼と手が顯はれた。

恐怖に襲はれてる矢先に又も怪しい物が現はれたので、彼れは殆んど喪心せんとした。

更に驚ろいた事がある、其の光る眼と手とは忽然として須臾と忘れぬ仇敵ラヴエングアの姿と變じた。

セヴァスチアンは身を戦かしたつゝ椅子に腰を落した。

ラヴエングアは一向平氣で其の方へ進み寄つて來た。彼れの顔には嚴かな微笑をさへ湛えて居る。

「もう年貢の收め時だよ。ナヴァルさん、君の妻は今警察署に居る。間もなく君は逮捕されるのだ。覺悟して居給へ！」

セヴァスチアンは身慄ひして、

「何故君は僕をこんなに苦しめるのか。僕は君に何か害を加へた事でもあるのか」
ラヴエングアの顔は急に緊張して何事をか言はんとしたが氣を換へて、

「ナヴァルさん。君の免れる方法が只一つある。君がチャリー、カーゾンを獄に投じた罪の自白書を書けば、其の方丈は免れる。私は警官を呼び返して此の場は逃がして上げやう。其の他の犯罪は自ら處置なさい」

うっかり其の自白書をかけば益々自分の將來が不安になる許りだ。これはうっかり其の手に乗られないと思つて首を振つた。

ラヴェンガーは此の様を見て、

「それじやもうこれ以上お話する必要はない」

かく話して居る間に戸外に自働車の音が聞えた。二人の警官とレオンティンが乗つて居る。

ラヴェンガーが室から出やうとしたので、セヴァスチアンは慌て、之を呼び止め「若し其の自白書さへ書けば君は警官を歸して呉れる事を誓ひますか」

ラヴェンガーが諾いたので、セヴァスチアンは急に机に向つて書き始めた、

ラヴェンガーは暫時之れを見て居つたが、表の方で呼鈴が鳴るので急いで書齋を去つた。

小窓から覗くとレオンティンが二人の巡査と共に立つて居つた。

レオンティンはラヴェンガーを見て、

「うまく捕まへて？」

頻りにペンを動かして居つたセヴァスチアンは窓越しにレオンティンがどうして戸を開けぬのかと不審顔をして居るのを見て、ペンを置いて考へた。

彼れは決然として今迄書いた自白書を破り捨てた。そして足音を盗んで戸口に近き其處にあつたチークで造つた鋼鐵の様に重い椅子を提げてそつと戸を開けて廊下に出た。

厚いカーベットが敷いてあるので足音のせぬを幸ひ密と忍び寄つて今し小窓から外のレオンティンや警官と話しをして居るラヴェンガーの背後から力を籠めて打ち

下した。

ラヴェンガーは不意を打たれて一語を發する暇もなく樹の倒るゝ如く倒れた。椅子の破片が其邊に散つた。

セヴァスチアンは階段を昇つて一つの室へ逃げ込んだ。そして窓から下の庭を掛けて飛び降りやうといふのだ。

だが下には石が澤山轉つて居る、此の二十尺の上から飛び降りたら足を折る位は覺悟しなければならぬ。

しかしこれより外に逃路はない。表口も裏口も既に警官が固めて居つてとても逃げられる譯のものではない。

セヴァスチアンは落膽せざるを得なかつた。表や裏の方で警官の聲が手に取る様に聞え、家の中では椅子や机を覆す様な音がする。

彼れの前面に電線が架けられてあつた。しかしそれに飛び付くには殆んど生命を投げ出して掛らねばならぬ。

すると、表の戸が破れた音がして警官がドヤ〜と屋内に闖入して来た様子だ。それから書齋を捜して見たけれどもセヴァスチアンが居らぬので階段を昇つて来た。

やがて戸に手が掛つた。背水の陣である。前へ行くより仕方がない。

セヴァスチアンは窓框にぶらさがるや、身を躍らした。此の時、警官はどや〜と室入へ這入つて来た。

第二卷　ヂヤリー白ら此世に来て

身を躍らしたセヴァスチアンの手はうまく電線を掴んだ、そして丁度宙乗の様な格好で電柱へ渡りそれから庭に滑り落ちた。彈丸が飛んで来て彼れの頭を掠めた。

幸ひにも庭の門に錠が下りて居なかつたので、それから街へ出た。突嗟の間に彼れの頭は鋭敏に働いた。其の門の傍の自働車の車庫の中に飛び込む

と彼れは愛用のオートバイを引き出した。これは快速力を有する車で大抵の自動車はとも及びも付かぬ優良なものであつた。

彼れの運は未だ盡きなかつた丁度下男が綺麗に掃除したへた處だつたのでそれを引奪る様にして飛び乗るや走り出した。

家の背後の方に廻つて居つた警察自動車は之れを見て追馳け始めた。

セヴァスチアンは山の手の方を目掛けて全速力で走つた。けれどもオートバイは坂路になると快速度の出ぬ事を知つて居る彼れは、方向を轉じて海岸指して逃走した。

もう死物狂ひである。狭い街の中を幾度か通行人を突き飛ばす様にして飛んだ。

警察の自動車は刻々に迫つて来る叫び聲が彼れの耳朶を鋭く打つた。

彼れは幸運にも期せずして波止場の方へ出た。

其の波止場は一番河口の方に在るもので、元は船渠にも使はれたものだが今は殆

んど廢物同様になつて居るのであつた。

河口の方に當り漁師の乗つた一隻のモーターボートに乗つて居るのが見えた。

彼れは直ちにうまい事を考へ付いた、そして波止場を疾走して乗つた儘オートバ

イと共に水中に飛び込んだ。

水中に飛び込んだ彼れはオートバイを放してモーターボートの方へ抜手を切つて

泳ぎ出した。

跡を追ふて來た警察の自動車は危く續いて水中へ落ち込まうとしたが漸くブレー

キをかけた。

セヴァスチアンはモーターボートを指して泳いで行くので、今は彈丸も届かぬの

で只アレヨ／＼と警官等は立騒ぐのみであつた。

何か波止場の上で騒いで居るので漁師等は耳を澄まして聞くけれども言葉が判然

解らん。其の内に一人の男が自分の方に泳いで來るので、これは多分助けてやつて

呉れといふのだらうと感付いた、そこでボートの連轉を始めてセヴァスチアンの方へ走り出した。

セヴァスチアンはとう／＼漁師に救ひ上られて仕舞つた。

此の時既にボートは波止場に近づいたので、警官は大聲で叫んだ。

「其の男は逃走した犯人だから岸へ連れて来て呉れ！」

其の言葉が聞き取れたか取れぬか解らん。又警官の官服が漁師の目にそれを見えなが見えぬかも解らん。しかしどちらにしてもそんな事は問題でない。………といふのはセヴァスチアンは猛然として漁師を海中に突き落して、自らモーターボートを操縦して沖の方へと走つて行つたからである。

警官は一杯喰はされたかと開いた口が塞がらなかつた。

ラヴェンガリの氣絶して倒れて居る傍でレオンティンは身も世もなく悲しんだ。

そしてセヴァスチアンが何處へ逃げたかなどいふ事は彼女にとつては問題ではなかつた。

セヴァスチアンが死なうが生きやうがそんな事はどうでもよい。只ラヴェンガリさへ生きて居つて呉れれば満足だ。萬一にも死ぬ様な事があつたら、それこそ全世界を失ふよりも彼女にとつては苦痛の話だ。

始めてラヴェンガリに會ふた時は自分の心がだん／＼彼れに傾いて行くのを何だか恐ろしい様な感じがして、只チャリーに濟まぬ事の様に思はれたのが追々兩人の交際が親密になるに従つてラヴェンガリに對する愛は却つて死せるチャリーに對する愛と憧憬を増す様な考へになつて、其の間更に何等の矛盾を起さぬ様になつた。やがて倒れたラヴェンガリは身動きして眼を見開いてレオンティンを見た。レオンティンは嬉し涙に昏れて額に熱いキッスをした。

然しチャリーの名は未だ清まつては居らない。重罪の汚名は尙ほ彼れに深く刻ま

れて居るのだ。

涙は彼女の頬を傳ふて落ちた。

「チヤリーは二度と此の世に歸つて来ない。妾はどうしても罪を雪いで上げる事が出来ないでせうか」と、レオンテインは泣き沈んだ。

ラヴェンガーは之れを慰めて、

「チヤリーは多分此の世に再び還つて来て自ら自分の冤罪を清めるでしやう」と其の聲に力があつた。

第三卷 秘密實驗室

レオンテインは顔を擡げて、

「お言葉は難有う御座いますがとてもチヤリーは此の世に生きては居りません。萬一生きて居れば何とか便りがあるに違ひないんです。妾は貴君にお目にかけていも

のがあります」

と立つて机の抽斗から新聞紙の切抜を持つて来てラヴェンガーに渡した。

記事には、囚徒輸送船中コレラで死んだ囚人の棺の中へチヤリーが入れ代はつて暴風の海へ其の儘投げられた事、それから官憲が其の失態を蔽はんとしてチヤリーが病死した様に公表した事など詳細に記載してあつた。

「まあ何といふ無謀なやり方でしやう。自殺より外に思はれません。チヤリーの死は儘かな事實です」と顔を暗くした。

「だがこれは單に新聞の記事に過ぎません」とラヴェンガーは何をか信するものゝ如く「チヤリーカーゾンが死を免かれないといふ證據がありますか。彼れが此の世に生きて居らぬといふ儘かな理由がありますか」と言ひ放つた。

若しラヴェンガーにしてレオンテインの心を獲んと欲せば當然チヤリーの死を主

張すべき筈である。しかるに事實は反對だ。レオンテインはいたく動かされて、
 「だが生きて居る事はありますまい」と悲しく言つたラヴェンガーは尙も、
 「それは斷言出来ません。只ヂヤリーに誠心を捧げてお出なさい。總ての事が善
 くなつて参ります。

此の言葉こそ始めて彼れの怪しい眼と手とを見た時に其の怪しい物の口から發せ
 られた言葉である。レオンテインは驚ろいて相手の心を探る様に凝視した。

ラヴェンガーの顔には微笑が浮んだ。微笑！ それには悲しげな懐かしげな影が
 宿つて居る。

「お言葉はどういふ意味です。貴君はヂヤリーの事に就いて御存じの事があります
 か、一體貴君は誰方です」

ラヴェンガーの顔にはまだ微笑が浮んで居る。
 「私？ 私は只貴女を護る影です」

「だが貴君が隠見自在の力は何處から得たのですか」とレオンテインは問ふた。

「貴女はあの隠れマントをお忘れですか」

「忘れや致しません。あのアントが片側が見えて片側が見えぬのは何う云ふ譯です
 か。それが第一不思議です」

ラヴェンガーはレオンテインの手を執つて、

「私を信じて下さるか。貴女の身邊には悪人許りですのに、私のみは信じて下さ
 るか」

「信せずはどう致しましやう」

「では私と一しよにお出でなさい。お目にかけるものがあります」

二人は、タクシーを驅つて町外れの或家に來て戸を明けて這入つた。

「これは私の住宅ではありませんが、只此の二階を秘密實驗室に借りて置くのです」

私は多くの敵を持つて居る身ですが萬事極く秘密にして居るんです、此の秘密を明すのは只貴女のみです」

ラヴェンガーは二階へ上つて一室を開いてレオンティンを案内した。レオンティンは驚ろきの眼を見張つた。

見る處普通の化學實驗室である。しかし何の必要あつてラヴェンガーは實驗室を有して居るのか、

「これは私の秘密の品です」とレオンティンに黒い小珠の入つて居る瓶を取り出して見せた。

「此の珠はこう瓶の中に入つて居る處を見ると黒いのですが、外へ出して手の上に載せて見ると何も見えません。といふのは此の珠の色が絶対黒色だからです。御存じの通り「普通黒色」といふのは決して眞の黒ではありません。絶対黒色とは肉眼に見へぬ色です」

と、尙も説明を續けたで、

「此の珠は（絶対黒色）です。これは南太平洋中の狂神巖といふ孤島で発見せられたものです。発見者は、シヨセフ、テツキスターといふ化學者です」

レオンティンは驚ろかざるを得なかつた。

シヨセフ、テツキスター慥かに聞いた名前だ。

誰れから聞いたか、何處で聞いたか覚えはないけれども慥かに聞いた名前だ。レオンティンはラヴェンガーの顔を穴の明く程見た。

「それで博士は記録に発見の事を詳しく書き残しました。お待ちなさい、今御覽に入れますから」

卓子の上にマントと共に黒珠の瓶を置いてラヴェンガーは金庫の方へ行つた。レオンティンも之れに従つたのである。

「私は金庫の中に其の記録をしまつて置くのです。他日公表しやうと思ふんですが

其の時は定めし興味あるものとなるでしやう。これがそれです」

金庫から彼れは水に濡れた痕のある紙の這入つた包を取り出して、卓子の方へ行つた。

奇態な事もあるものではないか。今其の上に置いたマントと黒珠を入れた瓶とが何處へ行つたか見えぬ。

彼れは卓子の上下を捜して見た。ない！

「黒珠！ 今儘かに此處に在つたのだが……」とラヴェンガーは息をはづませた。「妾はちつとも手を觸れませでした。貴君は何處かへ藏ひ忘れたのではありませんか？」

ラヴェンガーは其の邊を隈なく探して見たが。マントも珠も何處かへ行つて仕舞つた。

「金庫の中へ仕舞つたんではありませんか」とレオンティンは訊いた。

念の爲とラヴェンガーは金庫の中をも檢ためて見た。矢張りない。

二人は茫然と顔を見合せた。二人は丁寧に家中を捜し廻つた。大切な瓶は失くなつて仕舞つた。

第四卷 轢かれた人

「おゝ……あの窓が……あれは先刻から明いて居つたんですか」とラヴェンガーは叫んだ。

「いゝえ、開いて居なかつたと思ひます」

彼等が這入つて來た時に慥かに締めてあつた窓の戸が少しく明いて居る。

二人は首を出してみた、同じ様な隣りの建物との間には狭い路次があつて、其の家の窓から此方の書齋には手を伸ばせば届かぬ事はない。

捷い人なら隙を窺つて珠を盗む事は出来るのである。

「隣りの家に誰れが居るのか調べなければならん。そして果して隣りから盗んだものとするれば逃げない内に捕へなければならん」とラヴェンガーはレオンティンに云つた。

二人は階段を降りて街へ出た。

大勢の野次馬が一臺の自動車を取捲いて居る。

自動車上の一警官は一人の人を捕へて下の警官と何やら話して居る。

群衆の波に遮られてラヴェンガーもレオンティンも其の捕へられて居る人が男か女かさへ解らなかつた。

自動車に乗つて居つた。数名の若い女達は降りて行つた。様子をみるに誰れか人を轢いたらしいのだ。

やがて下の巡査が合圖をすると自動車は負傷者を乗せた儘他の警官付添で何處かへ行つて仕舞つた。

ラヴェンガーは今し群衆を解散せしめやうとして居る巡査に近付いて。
「轢いたんですか？」

「そうですあの見物自動車がやつて来ると出合頭に此の路次から一人の男が飛び出して来てやられたんです、それで今聖路加病院へ連れ込んだんです」と巡査は説明した。

「その男は丈の高い、色の黒い、頑丈さうな、口髭のある。西班牙人の様な男ではありませんでしたか？」

「そうです。では君の友人でござもあるんですか？」

「いゝえ、只知つて居る丈です。それから其の男は手に何か持つて居やしませんでしたか？」

「さあ、それは………そう／＼そう云へば何か離してはならぬ様に両手を固く握つて居ましたつけ。しかし掌の中には何も握つて居つた筈はありません」

「薬瓶の様なものを持つて居りませんでしたか」とラヴェンガーは重ねて訊いた。巡査は否と頭を振つた。ラヴェンガーは群衆に押し隔てられて居る。レオンティンの傍へ寄つて。

「慥かにセヴァスチアンだ。聖路加病院へ連れて行かれたから行つて調べませう。多少着物の中へでも珠を隠して置くに違ひない」

ラヴェンガーは、タクシーを呼んで「聖路加病院まで……………」と命じレオンティンを輔け乗せた。

そして更に運轉手に向つて

「若し、十分間で病院までやれば二十弗やる」

「腕限りやつて見やせう」と運轉手は答へた。

漁師を海中へ突き落してモーターボートを奪つたセヴァスチアンは海の方へ

と走り行くのであつた。

只逃げたいといふ希望から恐ろしい罪を犯した彼の心は漸く弛んで来て今度はガツカリして仕舞つた。それでボートの底に伏して只舵丈けなるべく河の中央へくと取つた。

間もなく彼は氣力を回復して来た。陸の方では直ぐに警察の手が廻つて、モーターボートの陸へ着くのを皆睨まれるに違ひない。その非常線の張られない前に上陸して仕舞はねはならぬと彼は決心した。

そこで、河の對岸に渡つて、其處の小さい船渠から上陸して、其の邊の古着屋から水夫帽と長い上衣を買つて。之れを身に纏ひ自分の濡れた着物を隠した。これで先づ大概大丈夫と安心して河岸から自宅に歸つた。

彼れは考へた。レオンティンの生きて居る間は自分は死刑を免れぬ。彼女さへ殺して仕舞へばよし、捕縛された所で證人がないから輕罪で済む。これはどうしても、

レオンティンを殺してから高飛ししなければならぬ。………と。

セヴァスチアンが家に近付いて来た時に、丁度ラヴェンガーとレオンティンがタクシーに乗って出て行く處であつた。

セヴァスチアンは之れを追ふた。始めは速力が遅かつたが、秘密實驗室の在る街の附近まで行くと急に速力を早めたので、セヴァスチアンは息せき切つて走るけれども危く見失ふ所であつた。

漸くの事で自働車は或る家の前に止まつたので様子を窺がつて居ると、二人はそれと知らず中へ這入つて行つた。

一體何する家だらう。何の爲めに二人が這入つて行つたのだらうと疑念を挿みつゝセヴァスチアンは内部が見度くてたまらぬ。

彼は其の家と隣家との間の狭い路次へ這入つて窓から中を覗いた。二人は今や階上へ昇つて行く所であつた。

セヴァスチアンは中々高い所へ攀るに上手な男であつた。彼はアルゼンチンの本國に居つた時分にはあらゆる運動で身體を鍊へて居つたので猿の様に隣家の窓際に据へ付かつて居る太い鐵管を登り始めた。そしてラヴェンガーの秘密實驗室の窓から少し下の處まで達した。

しかし屋内からはセヴァスチアンの姿は見えなかつた。

第五卷 病室で消失

セヴァスチアンが窓下に吊り下つて様子を見て居るとやがてラヴェンガーは一大秘密の説明をレオンティンに始めた。ラヴェンガーが隠見自在の秘術も要するに此の珠の力にあるだらう位の事は感付いた。

彼れの心は今や「殺す」といふ事から「盗む」といふ事に移つた。

ラヴェンガーが其の珠の入つた瓶とマントを窓際の卓子の上に置いて奥の方へ行

つたのを見たセヴァスチアンは夢ではないかと自分の眼を疑つた。

絶好の機会である。此の機を外しては又と盗む機会はない。彼れは片手に身を支へ片手を伸して瓶とマントを掴むや身を躍らして隣家の一室へ飛び込んだ。

其の室には誰れも居らなかつた。といふのは一體此の家は夏の間は空家になつて居るので、窓といふ窓は皆締められてあつたのだが此の窓は随分高い所にあるので多分大丈夫と思つて錠が下りて居らなかつたものらしい。

セヴァスチアンは其の室を抜けて階段を下り裏口から街へ出た。此の時はもう無我夢中である。

自働車がブー／＼音立てゝ来た。運轉手の叫聲が聞えた。それから何が何やら判らない。轢き倒されて仕舞つたのだ。しかも一輪は胸部を轢いた。

無意識の裡にも彼れはマントの見えない方を表にして、其の上から握りしめて居つた。

巡査が来て彼れの體を車の下から引き出して、折から通りかゝつた醫師に診察して貰つた所が傷は大した事はないけれども兎に角病院へ連れて行く方がよいと注意した。

服装を見ると濡れた着物に水夫の外套を着て居るのでこれは適切り外國の船員だらうと鑑定されて聖路加病院の病室に收容せられた。

幾何もなく眼を見開いて見ると向ふの隅に一人の患者が寝て居る許りで看護婦も出て行つて居なかつた。

自分の手は固く握られて居る。何故こんなにしつかり握つて居るのだらう。と其の理由を考へて見た。

そう／＼自分はマントを握つて居るのだ。此の不思議なマントといふのは殆んど蜘蛛の巣で作つたものゝ様に疊んで仕舞へば、片手の中に入る程小さくなるのであつた。